





臨床哲学のメチエ vol.16 秋冬号

2007年3月 日発行

編集 紀平知樹・高橋 綾

大阪大学大学院文学研究科 臨床哲学研究室

560-8532 大阪府豊中市待兼山町1番5号

clph@let.osaka-u.ac.jp

<http://www.let.osaka-u.ac.jp/clph>

# 目次

## 哲学対話@洛星高校

洛星高校 講座「哲学」 2006 年度 前期・後期講義内容  
哲学する” 態度”

高橋 綾

洛星高校での授業を振り返って

檜本 直樹

人類にとって戦争は必要か？

紀平 知樹

洛星高校で授業をファシリテーターとしてみて

植田 有策

学生アンケートより・受講してみたの感想

## 自然観察会報告・自然を感じ、対話する

第1回自然観察会・観察コース

自然観察会の反省

辻村 修一

哲学カフェから考えたこと

檜本 直樹・辻村 修一・川上 展代・紀平 知樹・大塚 尚徳

第2回自然観察会・観察コース

自然観察会+哲学カフェ 参加アンケート

哲学カフェの記録・〈何かと一体化するとはどういうことか〉

第2回自然観察会の感想

辻村 修一・河村 真梨子・植田 有策・中岡 成文

2回の自然観察会をふり返って

檜本 直樹

環境

曾谷 国広

2度の自然観察会に参加して

川上 展代

自然との別の関係を探して

紀平 知樹



# 臨床哲学のメチエ

臨床の知のネットワークのために Vol.16 2006 秋冬号

特集 哲学対話@洛星高校／自然を感じ、対話する





# 哲学対話@洛星高校



臨床哲学研究室が洛星高校で「哲学」の講座を開講するようになってから、今年度で3年目になります。今年度も、紀平、樫本、高橋が主なメンバーとなり、全10回の授業を担当しました。今回は、一昨年、昨年のように豪華(?)ゲスト陣の力を借りず、コーディネーターがほぼすべての授業を行い、議論の進行も行いました。

今年度は、ただ議論をするだけでなく、哲学的に考えを深め、議論するとはどういうことなのか、“良き”議論とはどのようなものなのかを、受講者一人一人が考え、実行することができることを目標にして、プログラムを組みました。議論はいつものように、楽しく盛り上がりましたが、そのなかでこうした目標が果たされたかどうかは、講師陣の反省、振り返りや、学生達の感想を読んでみていただければと思います。



洛星高校 講座「哲学」 2006年度 前期・後期講義内容

前期	第1回	オリエンテーション	今年度の授業計画の説明と講師陣の紹介。その後、二人一組になって、互いにインタビューし相手のことを紹介してもらう。紹介項目は相手の人が気になっていること、どんなテーマでみんなと話し合いがしたいかなど。
	4/22	紀平・高橋・樫本	
	第2回	哲学的に考える 入門編① 判断、立論を吟味する	「哲学する」ことの基本として、言葉を定義し、飛躍のない立論をすることの重要性を説明し、批判的思考力を試すために、一問一答式の問題に皆で挑戦した。参考にしたテキストは野矢茂樹著、『論理トレーニング 101 題』。
	6/10	紀平・高橋・樫本	
	第3回	哲学的に考える 入門編② ソクラテスの対話ゲーム (1)	去年度も行ったソクラテスの対話ゲームを行う。学生達に三人一組でソクラテス役、若者役、記録役に分かれ、ソクラテスと若者の問答を演じてもらう。去年よりも苦心していたグループが多かったような気もした。
6/17	紀平・高橋		
第4回	哲学的に考える 入門編③ ソクラテスの対話ゲーム (2)	前の回の対話ゲームを振り返り、哲学的に議論するとはどういうことなのか、どういう点に気をつければいいのか、その難しさとは何かについて議論した。	
6/24	本間・高橋・植田		
第5回	哲学的に考える 入門編④ 哲学的に考えるとは？	野矢茂樹の対話編『「人生は無意味だ」ってどういう意味』を読んで全員で議論。最後に前期全体を振り返って、哲学的議論とはどのようなものだと思うかを皆に意見をだしてもらいまとめ。最初の対話編は内容が難しいという声何人かから聞かれた。	
7/8	紀平・高橋・樫本		
後期	第1回	哲学的議論をしよう① 問いをつくる	前期の内容を振り返った後、後期に議論したいテーマを決め、三つのグループに分かれて、それぞれのテーマを問いの形にした。
	4/22	紀平・樫本 (栗栖先生)	
	第2回	哲学的議論をしよう② “延命に価値はあるのか”	学生達が出した問い“延命に価値はあるのか”について議論する。延命とはどういう事柄で、この問いが誰にとっての価値を問題にしているのかが議論の中心になった。
	4/22	紀平・高橋・樫本	
	第3回	哲学的議論をしよう③ “人類にとって戦争は必要か”	学生達が出した問い“人類にとって戦争は必要か？”について議論した。補助テキストは加藤尚武『戦争倫理学』。
4/22	紀平・高橋・植田 (栗栖先生)		
第4回	哲学的議論をしよう④ “救い”について	“救い”について、短いコント (いとうせいこう作、『絶望居士のためのコント』より抜粋)を朗読してもらった後、全員で議論した。	
4/22	高橋・植田		
第5回	後期の議論を振り返って	後期の自分たちの議論を振り返って、よかった点、反省すべき点などをあげて話し合った。	
4/22	紀平・高橋・植田		

## 哲学する“態度”

高橋 綾



今回の洛星高校の講座「哲学」は、前期は「哲学的に考える 入門編」として、クリティカルシンキングの教材やソクラテスの対話ゲームを用いて、哲学的思考、対話の“基礎”となる立論や意見の吟味の練習を行い、後期は、前期で得られたことを元に実際に自分たちで議論をしてみるという授業の構成になっている。授業をこうした構成にしたのは、第一に「自分たちで議論を作っていく」ことを主目的にしつつ、そこからさらに進んで、「自分たちが行っている議論を自分たちで評価できるようになる」ということまでを目標にしたからである。今回の授業では単に議論するだけではなく、“良い”議論とはどのようなもの

か、哲学的議論とはいったいどのようなものであり、それを実現するためにはどんなことに気をつけなければならないのかといった点から自分たちの議論をメタに評価できる視点を持ってほしいと考えた。よって、議論することと平行して、思考や対話に対する反省ということを常に促すよう心がけた。こうした目標や授業構成案を発案した責任者として、この二つの目標が達せられたかどうかを前後期の授業を全体として振り返って反省としたい。

いつものように学生の洞察力に助けられてある程度この目標は達せられたが、哲学的対話や思考の“基礎”を前期で、その“応用”としての実

際のディスカッションを後期でという構成それ自体は考え直す余地があると思った。後で述べるように、授業の構成において、このような基礎/応用という手順を無意識のうちに立ててしまったことにより、学生達には、“良き”議論をするための鍵が、実際の議論で自分たちがどう振る舞うか以外のところ(対話やテーマに関する知識や対話の技術)にあるような印象を与えてしまったのではないかという気がしている。

## ■ 前期 ■

前期は一回目ウォーミングアップの他己紹介に続き、二回目に論理的思考・批判的思考の教材【資料1】を使って一問一答式で立論や判断を吟味する練習を行った。三回目は対話のなかで思考の吟

味を行う練習として、前年度に引き続き「ソクラテスの対話ゲーム」を行い、四回目はそれを振り返って、対話について考えた。前期の最後の五回目の授業では短い対話編(『「人生は無意味だ」って、どういう意味なのだろう』、野矢茂樹作)を使って議論をし、そのあと哲学的議論には何が必要かを前期全体を振り返りつつ話し合った。(※ソクラテスの対話ゲームについては詳しくは前年度のメチエを参考にされたい)

二回目まではうまく進んだが、三回目のソクラテスの対話ゲームの時にややひっかかるものを感じた。(前年度にもソクラテスの対話ゲームは難しいという声があがったが)今年度はうまくいかない(あるいはなぜうまくいかないのかの気づきにいたらないで漫然と話している)グループが

### あなたの哲学的思考力を試す練習問題

#### (1) 言葉の意味ははっきりしているか

A、B、Cの3人の議論は「自由」の定義がそれぞれ違うためかみあっていない。A、B、Cがそれぞれどういう意味で「自由」という言葉を使っているか定義してみよう。

A：ホリエモンって自由でいいなあ。もう会社で仕事しなくてもいいし、好きなだけ家でさらさらしてられるんだもんなあ。

B：今のホリエモンは自由じゃないよ。だって信用をなくしてしたい仕事もできないし、自分でお金も稼げないから、なんにもしたいことできないもん。

C：前からホリエモンの生き方ってあまり自由とは思えなかったなあ。だってお金の縛られてるんだもん。

#### (2) 立論の筋道に飛躍や隠れた前提はないか

次の立論において、飛躍しているところや隠れた前提を指摘してみよう。

知的活動は規則には表せない。コンピューターは規則に表せることしかできない。だから人間はコンピューターよりも優れている。

東京大学の学生(大学院生)を除く)の女子の割合は15,747名中2,790名、17.7%(2000年)だから男のほうが頭がいいのだ。

【資料1】：前期第二回目「立論を吟味する」で用いた教材。(2)は『論理トレーニング101』、野矢茂樹、産業図書、2001年から引用、出題した。

去年よりも若干多いように感じられた。また「早く議論がしたい」という声も聞かれた。今考えてみると前年度は、何回も議論をして、その後でこの対話ゲームをしたために、それをきっかけにして、いままでの自分たちの議論に何が足らなかったかを振りかえる

ことができたという面があったが、今回は実際の議論を

してみる前の助走段階が長すぎたのだと思う。学生には、前期の授業の構成を野球に例えて、「まずはキャッチボールや打撃練習、関係プレイの練習などをしてから、実際の試合(議論)をしてみよう!」と説明していたが、彼らにしてみれば「そんな基礎練習はいいから、早くグラウンドに出せよ!」という気持ちだったのだろう。

それに比べると先シーズンは、いろいろ試合したけど今ひとつ頭打ちだ、なにかが足りないと感じていた時にソクラテスの対話ゲームをやってみることによって、無駄に投げたり打ったりするのではなく、一つ一つのプレイの意味に選手があらためて気づくことができた、というような感じ



前期第四回：学生たちが行ったソクラテスと若者の対話を皆と一緒に検討する本間さん

だった。

確かに哲学的思考や対話においては、意味を定義することや立論の飛躍をなくし、論拠を吟味することが重要だと考えられるけれども、そうした批判的・論理的思考の“基礎”練習を積み上げていって初めて議論という“実践”が可能になるのではなく、むしろ逆に、“基礎”と考えられているものは、“実践”の積み重ねのなかから抽出されたものであり、“基礎”練習は“実践”と平行して行うからこそ意味があるのだということに改めて気づかされた。

最後の五回目にはテキストを元に全員で議論をし、それを振り返って前期のまとめをすることができた。議論の最後のまとめで「哲学的議論に何が必要?」という問いに対して学生達が出してくれた意見は次のようなものだった。

- (1) 結論を出す
- (2) 意味を定義する
- (3) 比喩や例をつかう(理屈だけではなく具体的な例

を出して考えることの重要性)

- (4) 議論の道筋を協力して作る
- (5) 最初の問いに戻る

これらの意見はそれなりに的を得たものであると思ったが、後期に実際に議論をすることになった時に、これらの気づきがあまり活かされていないと感じた。

## ■ 後期 ■

後期は前期をふまえて自分たちで議論をするということで、今回は議論のテーマや問いも学生に考えてもらうことにした。前期最初の回では3グループに分かれて、テーマから問いを立ててもらった。しかし、出てきた問いをみると、「これで哲学的議論ができるのか!？」という問いが多かった。野球の比喻を引っ張ってここでも使うなら、いきなり府下一番の実業団チームと試合がしたいと言われた草野球チームのへっぼこコーチのような心境である。考えてみれば、生産的に議論し思考するために適切な問いを立てるということは、かなり議論や思考の実践に通じていないとできないわけだから、この結果は当然だったのである。そばについている講師が議論しやすい問いを作るように積極的に介入すべきだったのである。

特に“人類にとって戦争は必要か”という問いと“救いを求める宗教は必要か”という問いについては、「なるほど、男子高校生とはこんなことを考えて生きている人たちなのか。」と新鮮だったが、それをどう展開して哲学的な対話にしていくのか、と考えるとすこし困ってしまった。

### ◇ “人類に戦争は必要か”

私が一番苦手なお題だと思った「戦争」は紀平さんに引き受けていただき、「延命」は榎本さんをお願いし、自分は「救い」の回の進行をするこ

とにした。

「戦争」の回には、彼らがどんな議論をするのか様子見で参加したが、途中から議論に全くついていけなくなった。(戦争の進行の意図に関しては、進行役である紀平さんの感想を参照のこと。)この回の議論は(進行役の介入が少なく、彼らが思う存分自己流のプレイをしていただけない)いろいろと印象に残ることがあったので、それを記し、考えたことを書いておきたい。

私がついていけなかった一番大きな点は、誰にとっての、どんな戦争を議論のなかで問題にしようとしているのかがまったく明らかでなかったことである。(これは後で学生に自分の感想としても話したことであるが)太平洋戦争、アメリカのイラク攻撃、アジアの情勢などいろいろな具体例が出、中にはクラウゼビッツの『戦争論』を引用してくれた学生もいたが、どの発言も、そうした戦争がほかならぬ発言者であるその人にとってどんな意味を持っているのかということが私には全くとっていいほど見えなかった。そうした語りや議論は戦争についての“朝まで生テレビ”的な一般論としては成り立ちうるし、そうした議論のなかでよく耳にする意見もあったが、それがはたして哲学的な議論なのかといわれると疑わしく思われた。

その中でも特に自分は絶対そういう発言はできそうにないと思い、驚いたのは、戦争の主体(国家やその指導者)を自明なものとし、さらにそれら自分をアイデンティファイして語る発言者が

思いのほか多かったという点である。(ここにも右傾化の波が?!と一瞬思ったが、三国志やガンダムが好きで一彼らはどのジャンルにおいても案外古典を大事にしている一歴史、ゲーム、アニメヒーローに自己同一化しがちだという高2男子的感性に由来するところも多くあるようだった。あるいは“右”的感受性はこうした男子的土壌を一部源泉に培われていくものなのかもしれないが。また、授業の後、学生同士が「おまえ、案外“右”なんだな」とか「お前は“右”かと思ったけど結構“左”だったな」とささやきあっているのを耳にし、これまた興味深く思った。語調からして、それらの感想はお互いの政治的立場を真剣に問題にしているというよりもむしろ、“右”“左”を“キャラ”として演じている印象を受けた。)

それはさておき、この回の議論から翻って考えてみて、自分がなぜ「戦争」についての哲学的に議論するということを「苦手」だと感じたのかがよくわかった。

要するに、私のような者は、戦争や、戦争の主体とされる国家と自分がどのような関係にあるのかがまずよくわからないので、そこから先に進めないのである。だから、戦争の主体や国家にアイデンティファイして戦争を肯定することも、それらを徹底して否定し、それに反発することも、どちらの立場にも身を置くことができず、「どういう立場で、どういう言葉で語り出すことができるのか」と戸惑い、煮え切らない“ノンポリ”的

態度をとることになる。

同じような戸惑いを国家や政治、社会制度をテーマにした哲学カフェでも感じたことがある。「自由」や「親切」といったテーマの時には、「どうやったら自由になれるか」「親切にするのはいいことか」ということだけでなく、「そもそも自由ってどういうこと?」「親切にするってどういうこと?」という根本の前提を問う問いが発しうるのに、戦争や死刑など国家や政治に関連する話題になると「そもそも我々にとって国家とはどういうものであるのか」という問いをすっとばしていきなり“右”と“左”との論争になることが多い。死刑をめぐる哲学カフェで進行役をしたカフェフィロメンバーの武田さんと話した時、彼はこのことを「国や政治のことを語るときには、みんな“スイッチ”が入る」と表現していた。むしろこちらとしては、なぜそのスイッチが入ってしまうのかを問題にしたいのに、一度“政治的”論争が始まると、「国家とは何か」というようなそもそもの前提はほとんど顧みられない。

哲学的な議論が“政治論争”に変わってしまうのを見るたび、それに参加できない自分に引け目を感じつつ、「政治的《主体》にはなってもいいけど、政治のおしゃべりの《語り手》にはなりたくない」と言っていたロラン・バルトのつぶやきを思い出したりしていたのだが、この回の議論を通じて、そうした“政治論争”はまったく哲学的ではなく、「私(たち)にとって“国家”とはなにか」「私は戦争についてどんな立場から何を語りうるのか」というそもそもの前提をきちんと問う

ことこそが必要なのだということがはっきり分かった。

(この授業の後、永井均さんの『子どものための哲学対話』を読んでいたら、「右翼と左翼ってなに？」という問いについて、主人公のぼくと対話相手の猫ペネトレが対話をする場面がほとんど唐突に出てきた。「右翼と左翼とどっちが正しいの？」という問いに対してペネトレは「どっちも同じようなもの」と言い、「対立ってというのはほとんど前提を共有しているものの中でしかおこらないんだよ」と答える。右翼と左翼の対立も「政治ってものが、心をわきたたせるようななにかだと感じるなかまたちの間でだけ、意味を持つような対立だからね」とペネトレは言い切っていた。この会話を理解できる子どもがどれくらいいるのかよくわからないが、洛星高校の人達にはぴったりではないか思った。)

#### ◇“救い”について

以下では、私が進行をした“救い”を巡る議論を報告しておく。学生の話し合いで最初に出された問いは「救いを求める宗教は必要か？」であったが、戦争の回の反省としてこの問いのままでは大雑把な一般論に終始してしまいそうだったので、救いをテーマにした短いコント【資料2】をテキストとして用意し、それをもとにして救いについて考えていくことにした。

切迫した状況のなかで、奇妙で自分勝手な振舞いばかりする男Bがいったい誰なのかというこ



とや、男Bの考える救いと男Aの考える救いの違いは何なのかということ巡って、徐々に意見が出た。最初に口火を切った人たちの意見では、男Bは悪魔であるとか、ただの馬鹿というものが多かった。男Aと男Bの考える救いの違いは何かを議論するうちに、男Aの考える救いは「俗世的なもの」だが、男Bの救いはそれとは別のも、あるいは「宗教的なもの」と言えるのではないかという意見が出されたあたりから、Bの言う救いを言葉で分節化するとどうなるのか、そしてBはいったい誰なのかについてゆるやかに関心が向かい、そこからぼつぼつと深められた意見が出た。

- ・男Aは救われていないが、男Bは救われている。なぜなら、救いとは自分が満足する状態に至ることであり、男Aは満足をいまだ知らないが、男Bはすでに自分に満足している
- ・男Bはソクラテスのようだ、男Aを問い質すことによって、男Aに救いとはなにかを気づかせようとしている。(このコントはキルケゴールの

コントのあらすじ（いとうせいこう、『幻覚カプセル 絶望居士のためのコント』、スイッチ書籍出版部、1992年より）

男Aと男Bが吹雪のなか遭難し、山小屋に閉じ込められている。男Bは男Aがとっておいた食料や燃料を勝手に使い、男Aが合わせておいたラジオの臨時ニュースを勝手にポップスチャートに変えてしまう。さらに男Bの行動はエスカレートし、おならをしたと言って窓を開け放してせっかく暖まった部屋を冷やし、ようやく到着した救助隊に「大丈夫ですよ」と言って、ご丁寧にタバコまで進呈して帰らせてしまう。男Aは男Bの行動に絶望し、座り込み、泣き出してしまう。

（以下、実際のコントの最後の部分の抜粋：一部本文を変更し簡略化している）

- 男B 絶望したがかり屋だねえ、あんたは……………。
- 男A どうすりゃ絶望しないでいられるんだよ、こんな状況で！？
- 男B （微笑んで）例えば、お腹がすいたら僕を食べればいいじゃないか。乾かして燃やしてもいいよ。
- 男A 俺が絶望したがかり屋なら、お前は悪魔だ。
- 男B 何故？
- 男A 俺を苦しめた上に、罪を犯させる気かよ。
- 男B 僕は食べられてもいいんだよ。
- 男A お前はよくても、生き残った俺に罪が残るだろう！？
- 男B （少し声をあげて）そうだとすると、その時あんたに救いはあるよ、きっと。
- 男A どんな？
- 男B 知らない。具体的に言えるようなら、それは望みでしょう？救いじゃないよ。
- 男B、椅子の方に行き、向こうむきに座る。
- 男A （ため息をつき）お前は神か、悪魔か、そうでなきゃ馬鹿だ。
- 男A、男Bの後ろ姿をじっと見ているうちに憎くなったのか、荷物を持ちあげ、男Bの後頭部を殴ろうとする。が、できない。
- 男B 人を殺しても救いはあるのに……………信じないんだねえ……………。
- 二人、そのまま長い沈黙。次第にラジオの音が大きくなり、やがて美しいメロディーが大音量で流れ出す。
- 男A 驚いて部屋を見回し、最後に後ろを向いたままの男Bを見つめる。
- 男A （緊迫した調子で）神……………なのか？
- 男B 神様がいることが救いなのか？……………（音楽のなかで責めるように）
- 男A しばらく立ちすくんでいる。そのうちに音楽の間から臨時ニュースが聞こえてくる。臨時ニュースはこの隕石墜落による災害が、未曾有の被害をもたらしたと、大火災が起こり、それが拡大していることを告げている。男Aは音楽とニュースの流れる中、男Bの背中を見つめつづける。
- 男A ……悪魔か？
- 男B （あきれたように笑って）悪魔がいると救われるの？
- 男A 混乱して周囲を見回す。音はさらに大きくなっていく。
- 男A （男Aの背中に）じゃあ、馬鹿なのか？
- 男B （嘲るように言い捨てる）僕が馬鹿なのが救いなのか？
- 男A 何も言えず沈黙する。
- 男B 黙ってれば救われるの？（振り返ると、たっぶり間をおいてから）ねえ？…

「絶望に至る病」をモチーフとしたものであったので、キルケゴールが参照していたソクラテスの名が出てきたときにはかなり驚いた)

・救いがあるから信じる、のではなく、信じるからこそ救いがある

というよう鋭い意見が出されたが、時間がなくなってしまう、これらの発言を踏まえて“救い”とは何かをもう一度考え皆で定義するまでには至らなかった。

ところでこの回では、このように救いとは何かについて考えを深めていく何人かがいる一方、最初から救いというテーマで議論すること自体に否定的な人がいたり、「何を救いとするかは人それぞれであり、そんなことについて話してもしかたがない」という相対主義的な意見が途中で噴出したりして、こうした人たちに應對しつつ、議論を組み立てていくのが大変だった。そうした人にとっては、救いや信仰の本質について議論し考察することと、実際にある宗教を信じることを区別するのが難しかったようで、この混同に基づくものと思われる、救いや信仰についての議論に対する頭からの拒絶反応が幾度となく浮上した。進行役である私は、この二点を区別するようにうまく促せなかったし、またなにかを言っているようで、自分の意見を全く述べていない相対主義的な言説にひっかかりつつも、それにうまく反応し、議論の中に巻き込むことができなかった。またこういったテキストを用いる際には、単にテキストの読解や解釈で終わるのではなく、そこから少し

距離を置いてテーマについて自分たちで考える方向に持っていくのが難しいところであり、また一番のポイントでもあると思った。

しかし先に述べたように、一方で救いの本質について考察を進めてくれた人たちがおり、また、救いについて語るなんて無意味だ、と主張していた人の一人は、五回目の振り返りで「救いの回は、自分は関心が持てなかったが、議論としては深まっていたと思う」という意見を述べた。

こうした人は、議論に参加し巻き込まれることには距離をおきつつ、議論をメタに評価する視点を持って観察していたのだろう。しかし、後に述べるように“良き”議論をすることは知識があり、議論の分析ができるという問題ではなく、実際の議論のなかでの“態度”の問題だと私は考えるので、できればこのようなタイプの人でも議論の内部での発言をして欲しかったし、議論のメタレベルに立って分析するという振る舞いが議論の内部から見た場合にどう見えるのかということに気づいてほしかった。こうしたことを考えると、ソクラティックダイアローグで用いられる、議論の参加者全員が自分達の議論を振り返って分析するメタダイアローグの意味がよく分かった。議論自体をしている人と議論をメタに分析している人が混在するのは、混乱や無用の反発を産むので避けるべきなのだろう。)

## ◇ 振り返りについて

「延命に価値はあるか」「人類に戦争は必要か」「救いについて」の三つの問いについて議論した後、最後に自分たちの行った議論について振り返って話し合う回を設けた。

後期の議論については、自分達の中でも不満やストレスがあったようで、いくつかの反省点が出された。「定義や論拠付けがなく、好き嫌いだけの水掛け論になっていた」「お互いの話をよく聞いていなかったのではないか」というような点が主にあがっていたと思う。

最後のほうでは、授業の運営構成や進行に対する不満もいくつか出された。特に記憶に残っているのは、「哲学的議論とは何かがいまだによく分からない。これこそ理想だ、という議論をビデオでも何でもいいから手本として見せてほしい。」という意見と、「クオリティの高い議論をするには、準備や予習が必要なのではないか。そのためにはもっと講師がこの講座を計画的に運営して、段階を設けてステップアップすることや、あるいは課題を出す、予習をさせるなどさせることが必要だったのではないか。」という意見である。

どちらの意見も、こちらの授業の構成や内容のまずさから生じたものであり、十分頷けるところがあると同時に、この二つの意見の中には、“良き”議論に対する誤解が多かれ少なかれ含まれていると感じた。これらの意見の中には、議論の理想型やテクニックを“理解”し、実践に“応用”

する、あるいはテーマについての知識を積み重ねて、それで実際の対話をする、という見方が存在している。こうした考え方においては、対話や議論の場は技術を転用し、知識を披露するための二次的な場でしかなくなってしまう。

しかし、今年の授業で強く感じたのは、“良き”議論を営むのに不可欠なことは、対話や議論の技術でも、ましてやテーマについての高度な知識でもない、ということである。言葉を定義することや論拠付けを丁寧に行い、判断を吟味することの重要性をどれほど知識として知っていようと、一問一答式のクリティカルシンキングの教材をどれだけ解いてみようと、それらは実際の議論の場から抽出され、状況から切り離された知識でしかない。重要なことは実際の議論の中で、さまざまな意見に相対したときにどんな“態度”がとれるか、ということである。

判断を吟味し、論理的に考えることと、他人の意見をきちんと聞く、自分の意見が伝わるように丁寧に話すという態度は別々のものではなく、言葉の意味をきちんと決めたり、意見の理由を述べ、それを他人とともに検討していく吟味や論理的思考のプロセスは、他人とともに対話に向かう“態度”、対話における徳として、まさに必要とされているのだと思う。

その意味で今回の授業構成は、議論を実践するまえに、“良き”議論についての知識やテクニックに触れるというような形になってしまった面がある。“良き”議論を営むということは、他人に向かい、他人とともに話し合う時の“態度”の

問題であるということ、このことを十分伝えきれていないとするなら、この講座はあまりうまくいかなかった、と言うべきなのかもしれない。次回があるとするなら、基礎と応用、知識や技術と実践というふうに切り離さない形で、あるいは両者のフィードバックということを考えて、教材や授業の構成、議論への介入の仕方を工夫しなければならないと思った。

最後になりましたが、へっぽこコーチについてきてくれた受講者の皆さん、この講座の影の主演 洛星高校のクリス先生、講師として関わってくださった皆さんに感謝しつつ、この振り返りの文章を結びたいと思います。



# 洛星高校での授業を ふり返って

榎本直樹

前年度に引き続き、今年度も洛星高校での授業を担当することになった。前期では「哲学的に考えること」に重点をおいた基礎編、後期は「哲学すること」に重点をおいた実践編として授業を組み立てた。私自身も後期に授業を受け持ち1年がすんなり終わる予定であった。が、大失態をしてしまった！最後の授業で寝坊をしてしまった！朝起きたら授業が始まっている時間であった。みなさん、ごめんなさい。

そういう理由もあって、ここでは最後のふり返りの授業で話したかったことを中心に書きたい。後期は生徒自身が考えた〈問い〉をもとに哲学カフェのように進行役が一人入って議論をするという形式をとった。私の担当した回では「延命に価値はあるか」という問いをめぐって議論を行った。さて、最終回のふり返りにおけるこの議論に対する生徒の評価は、聞くところによるとあまりよくなかったようである。みなが好きなのを言い合い、論点がまとまらず、どこに向かっているのかわからず、議論しにくい、哲学的でない、云々。確かに他の二人(紀平さん、高橋さん)はテキストを用意したので議論はしやすかつ



たようだ。私は何も用意せず、いきなり「では・・・」と始める形式だったので不満が大きかったのかもしれない。でもあえて、議論は比較的よかったと言いたい。

ふり返ってみよう。問いは「延命に価値はあるのか」であった。生徒はまず「価値がある/ない」の判断の基準ではなく、「延命」という語にコミットした。「延命」にどういう事柄が含まれるのかということから議論は始まり、「食べることは含まれるのか」「輸血や手術はどうか」「人工呼吸器をつけること」という発言がよせられた。そして「食べること」を今ここでいれてしまうと議論が広がりすぎる」という指摘がなされ、今回の議論では取り上げず、多くの人が「延命」ということで「延命治療」を考えていることがわかった。

次に延命治療ということによってどういう状況を考えるのかという点について「植物状態」「闘病(末期)」、事故に伴う「緊急の手術」などをめぐって発言が交わされた。その発言のやり取りの中で見えてきたのは「延命」というのは「終わるはず

のものを終わらせなくする部分」(つまり、本来3日のところを10日に延ばす場合、3～10の7日間の部分を延命と呼ぶということ)のことだろうということであった。

上の議論と同時に「誰にとっての価値が問題なのか」という視点からの発言もあった。こちらの議論では、「本人が決定できる時には延命とは言わないのではないか」という発言をきっかけとして、「本人が決定不可能でまわりの人がきめなくちゃならない時に延命が問題になる」という発言、さらに「まわりの人が(患者)本人のために思って決めるか、まわりの人たちのことを思って決めるかによって問の意味も変わる」という発言につながった。そして「延命に価値があるか」という最初の問いは、まわりの人たちにとっての延命の価値が問題になる時に意味をもつ、そしてそこを問題にしようとして一致したところで時間がきた。

どうであろうか。もちろんこれらの発言の間には、多くの脱線や論点に一見すると関係なさそうな発言などがはさまり、また上の二つの論点が同時に話されたこともあって全体の印象としては雑然としていた。でも、いろんな考えをもった人びとが集まればそんなものであろう。それよりもさまざまな論点を示され、議論をするための準備までできたという点を評価したいと思う。その点において、上手く対話になったかどうかはともかく、今回の議論はまあまあよかったのではないかなと思う。

この議論を通して、哲学的に対話するとはどう

いうことかについて考えさせられる部分もあった。今年度の授業では「哲学的に考える」ということで、特に「判断に対する根拠(理由)」を吟味するという点を重視したが、そのことは哲学的に考える/対話することにとっての一側面にすぎないだろう。違った角度からにはなるが、哲学的に対話するためには、そしてその対話を哲学的にするためには、議論に、そして自分以外の発言に対してどのように向き合うのかというこちら側の態度がまず問題になるのだ、ということ強く感じた。生徒達の議論を見ている、自分と異なる意見に対する反発、自分の意見を理解しない他人に対する苛立ちがよく目についた。その時に自分の考えと異なる他の発言をどんどん切り捨てていくのではなく、一旦立ち止まり、その発言の根拠のさらに背景にさかのぼろうとする想像力、そしてそもそもその議論そのものに向き合う際の自分の態度。表現がふさわしいかどうか自信がないが「相手を慮ること」といえばいいだろうか。まず私が相手を慮ること。でもこれは単に相手の存在や気持ちを考えましょうということとは何か違いそうだ。この「慮り」への引っかかりに引っかかりを感じつつ、感想にかえたいと思う。

洛星高校の授業にかかわったコーディネータのみなさん、洛星高校の栗栖先生、1年間ありがとうございました。



11月26日  
人類にとって戦争は必要か？

紀平知樹

私が担当した授業の問いは「人類にとって戦争は必要か？」という問いであった。後期の授業では、前期のうちにアンケートなどで書いてもらった学生のみなさん自身が考えたい問いを三つのジャンルに分けて、それぞれに分かれてそのジャンルから一つの問いを作るという作業をもらった。私は、この「人類にとって戦争は必要か？」という問いを作ったグループに入って(オブザーバーとして)いたので、この回のファシリテーターを担当することになったわけだが、問いを作る段階から、かなり難航をしていた。短い時間の中でもいろいろな紆余曲折があり、最終的には、この問いをグループの問いとして発表したわ

けだが、その時点でも、今ひとつ、この問いによって何を問うのかということにははっきりできていなかったように思う。そしてこの問いを立ててさらに三週間の時間が経って、クラス全員でこの問いを議論する日がやってきた。

私自身、この問いでの対話のファシリテーターをすることになってから、どのように議論をすすめるべきか、何を問うべきかなどいろいろ考えてみたが、なかなかこれといった妙案が出るわけもなく、無情にも時間だけが過ぎていった。その中で考えたことは(ある種の逃げでもあるような気がするが)、75分という短い時間の中で、この問いに対する答えを出すということを目的とす

るのではなく、むしろうまくいかない議論を通して、何がよくなかったのかを反面教師的に気づいてもらえばいいのではないかと考えた。また、このテーマに関して、誰も実際の戦争を経験したことがないということもあり、加藤尚武の『戦争倫理学』の数頁をコピーして当日の授業に臨むことにした。

当日の授業では、学生のみなさんには、議論の手続きや答えを出すために必要なことは何かを考えてもらうということはあるが、この問いについての議論を行ってもらった。最初のうち、「戦争をどう定義するか」ということや、「戦争は目的か手段か」などといったことを考えたいという発言があり、しばらくそのことについての意見を話してもらっていたが、少し行き詰まりかけたところで、当日配布した『戦争倫理学』のコピー(19 - 21 頁、37 - 38 頁)を読んでもらうことにした。

これが一つの転換点だったかもしれない。

この資料を読んだあとの学生の発言は、ある意味では戦争を定義するという方向での発言だったように思われるが、同時にまた、きわめて抽象的(理念的という意味ではなく、具体性を欠く)な意見が多かったように思われる。抽象性というのは、ある種の普遍性をもつがゆえに多義的になりやすいし、それだけにその語をどのような意味で使っているかを明確に定義しなければ、議論が混乱してしまう。そのような議論に介入して、言葉の意味を定義させたりするのもファシリテーターの役割であるが、今回はあまり介入せずに議

論を続けてもらうことになってしまった。

今年度の最後の振り返りの授業でも、学生のほ

うから「もう少し議論に介入してほしい」という意見や、「問題設定に問題がある」というような意見が出されていた。これはその通りかと思う一方で、では、議論のどこに介入すればいいのか、どのような問題設定をすれば議論が深まっていくのかという点を参加した学生の人たちみんな考えてほしいという気もする。あるいは、今回の対話は、うまくいかなさを通じてそのようなことに気づいてもらえればとも考えていたので、それはそれでよかったのではないだろうか。もちろんうまくいかない対話の原因を究明する時間をもっとあればなおよかったのではあるが……。

ともあれ、このもどかしい議論を70分という時間を我慢して、いろいろ考えながら対話に参加してくれたみなさんにはお礼を言いたいと思います。





## 洛星高校で授業を ファシリテート してみた

植田有策

前期後期通して全 10 回の授業のうち私が参加したのは、6 ないし 7 回であったかと記憶しています。実際にファシリテートしたのは全 10 回の最後の回、これまでの授業の総まとめでありました。それまでの回では、私はほとんど単なる観察役になっており、得意の「ひるみ」で言葉が出ず、一向に自分の口を開けることができませんでした。授業の計画面に関しても、他の方々にまかせっきりで、他の皆さんのお役に立てなかったようにおもいます。といつつも、授業で生徒達が議論しているのを観察していると、議論がいかに展開しているか、発言のよいところ、まずいところなど、良い議論、悪い議論が非常によく見えて来て、私自身にとっては今回の参加はとてもメリットが

あるものでした。そういう意味で私はかなり生徒に近い立場にいたといえるかもしれません。

さて私が授業を担当した最終回を回想してみます。この回は、主に前 3 回、檉本さん、紀平さん、高橋さんがファシリテーターを担当した三つの議論(各々戦争、生命、宗教)の振り返り、大きく見るとこの 1 年の授業全体の振り返りをするというものでした。そしてその振り返り自体もこれまで学んできたような議論のような形式で行うというものでありました。

普段比較的目標めるのが遅い私としましては、朝早く起きるのは、もうそれだけで身が引き締まる思いがするのですが、当日は朝の寒さがさらに私の緊張感を高めさせました。そのため、冒頭か

ら自己紹介を忘れる、議論をするために机を丸くするのを忘れる、始まって早々いきなり高橋さん、紀平さんに助けを求める等々、凡ミスを連発していたかと思います。高橋さんの「みなさん、今日は植田君を鍛えるのに協力して下さい」という声があり、生徒達も授業通して全体的に私に協力的な空気を作っていた頂き、心苦しいやら有り難いやらという心境でした。誰が生徒だかわからなかったかもしれません。いや当日一番学習したのは私だったでしょう。

実際の振り返りの議論では、生徒のみなさんがかなり冴えていて、先の三つの議論のそれぞれの方法の違い、自分たちの議論における反省、前期の授業をふまえた哲学的議論とは何か、等々についてかなり自覚的に発言ができていたかと思います。一方ファシリテーターはといえば、反省点について先に自分でしゃべりすぎる、ある発言があった後それに対する他の生徒達の考えを聞かずに次の話題に移ろうとする、時間配分のまずさ、など進行役として必要な技術の不足がかなり目立っていました。

しかし何はともあれこの日は紀平、高橋両先生の的確なフォローと、つたない私のファシリテーターをあたたく見守ってくれた生徒の



皆さんのおかげで、非常に有意義に、そして楽しく議論ができたかと思います。

そしてこの日に限らず生徒達はこの授業(私の出身高校の常識から考えると極めて特殊なこの授業)に形はさまざまであれ、前向きに参加していたかと思います。最後に私を引っぱって下さった紀平さん、高橋さん、檉本さん、この度の洛星高校関係者の皆さん、そして最終回にこの情けない男を鍛えてくれた洛星高校の生徒の皆さん、どうもありがとうございました。

## 学生アンケートより

# 受講してみたの感想

今回も、授業に参加してくれた多くの学生の皆さんから感想を寄せてもらいました。鋭い考察や講師に対する批判、提案も混じっています。今回は、授業を担当した紀平、樫本、植田、高橋の四人の講師が寄せてもらった感想について寄せた応答、反論、言い訳、つぶやきも同時に掲載しています。

何かについて哲学するという事は、徹底的に論理を追求することなのかと思った。ただそれだけで論理学になってしまうし、哲学とそれとの差は何なのかは、まだよく分からない。そうとう割合で同じなのかもしれない、とも思う。身近なことについて哲学するとかなり時間がつぶせると思う。後で悩む時間を考えると、もっと時間をつぶせると思う。(河本・前後)

◆論理的に考えるということは、たしかに哲学的思考や対話にとって不可欠なことです。論理的思考のおおもとには、(いわゆる論理学のような数式のような厳密な概念操作ではなく)他人の意見をきちんと聞くことと、分かるように自分の意見を整理して伝えるという“態度”があるのだと思います。(高橋)

「哲学的議論」をすることが難し〜いことが分かった。哲学的議論ができるようになるには、我々には少なくとも

- ・人の話を聞く(これは最終回の意見で出ましたが)そして理解する。
- ・理解してもらえるように話す。話している人だ

けが理屈を分かっているような状況もありました。

・発言の最初の「でも・・・」、文末の「・・・思うんですよ。」、これはやめた方がいい。

このくらいは必要なんじゃないかな。

ファシリテーターのやり方は人それぞれなので(クリス先生談)ファシリテーターはあれでよかったのでは? (笹井雄太・前後)

▲三つ目のポイント「発言の最初の・・・」についてですが、その是非はわかりませんが、話し方(とくに接続や文末表現)にはその人の考える道筋が、発言の内容以上に表れていると考えられることはできないでしょうか。笹井君がそこに発言者のクセを見抜いたのであれば、あるいは発言者の考え方のクセを発見していたのかもしれませんが。(植田)

栗栖ファンという理由で取ったこの講座、前期は難しくて何言ってるのかよく分からず…。後期の議論も議題が難しく…。世の中難しいな、ということがわかって結構楽しかったです。ありがとうございました。結局哲学的って何?

(大西弘毅・前後)

▲私自身が学んだことですが、議題がいかに難しくても、切り込み方で議論が如何様にでも(良くも悪くも?)進行していってしまうのでしょうか。(植田)

◆栗栖先生を越えられなかったことがとても残念です。クリスト教恐るべし!(高橋)

哲学的議論は未経験の学生が集まって、しかも自分たちで決めた議題で議論しているわけだから、議論が上手く進むわけがなくて、大切なのは上手な議論をすることではなくて、それを求める過程なのだ!以上。(田中貴士・前後)

●その通りだと思います。(樫本)

後期の授業に前期の体験が活かせなかった。この講座を受けての一番の感想は、「日頃いかに考えずにしゃべっていることか」ということ。ソクラテスの対話ゲームで主張の理由を問われた際に「だってそうなんだもん」と言わざるを得なかったことが悔やまれる。一番大事なことは人の話を聞き、自分の考えをよく考えることですね。

(中山尚治・前後)

◆救いの回の朗読の男Bはかなりの怪演でした。あの二人の演技力が後の対話にも影響を与えていたと思います。ありがとうございました。(高橋)

講座における議論の内容は確かにあまり程度の高いものではなかったかもしれないが、その中において程度の高い議論とはどういうものかというのを模索できたという意味では、大いに意味のあることであつたように思えた。色んな考えがあるということを理解しなくてはならない。決めつけてはいけない。願わくばもう少し回数が欲しかった。(柳田拓也・前後)

●「自分(達)が議論の程度の高い/低いを何で分けているのか」を考える回が欲しかったですね。(樫本)

▲「模索」を最終回の反省である程度言語化していくことができたと思いますが、その反省をフィードバックする議論をすることができませんでした。回数が足りないというよりは、それを考慮した講座の配分ができなかったことが問題であつたと思います。(植田)

「哲学的議論をしよう」「しゃべり場にならないようにしよう」を目標にみんなで議論してきたが、最後に指摘があつたように、どうしても自分の好き嫌いの言い合いになる傾向があり、達成できていなかったように思う。だけど「そう思う事が哲学的議論をするきっかけになる」というのはとても納得した。(若林洋平・前後)

◆苦し紛れの開き直りに納得していただけてよかったです。いつも絶妙のタイミングでの“名言”をありがとう。(高橋)

自分はこの講座に参加するのは初めてでしたが、今回は三回の議論においてはほとんど聞き役になりました。その理由としてはまずこういう議論の場に立つことがなくて、すぐに自分の意見をまとめることができなかつたのもありましたが聞き役に回ることで自分が少し考えていた考えの他に他人はこういうことを考えているのだと知ることができました。それに対して意見を言うことができませんでしたが、この場に参加すること自体に意義があつたと思います。(小寺啓太・後)

▲議論(あるいは対話でも)で「聞く」ことで重要なのは、それによって聞く者自身に何か変容がおこること、あるいは違う意見を他人の考えを聞くことで、自分の立場に気付かされるということなどがあると思います。他人の考えを知ること、自分の考えの主張とその根拠の提示でとどまるのであれば、それは複数人による演説みたいなものになると思います。(植田)

哲学的議論というものがどういうものなのかというのを少しつかめた、ような気がする。この講座の目的自体を勝手に解釈していた人も中にはいたようで残念。概して漠然としたテーマが多かつたので行ったり来たりで出口が見えなかつた。他人の意見が自分と違つた時にそれを吟味せず否定することから入るのはどうかと思つた。(匿名希望・後期)

各自が自分の意見を持っていて、そしてそれを絶対にまげようとしなかつた。これが今回の話し合いが上手くいかなかつた理由だと思う。哲学的議論といつているが実際は選挙のようだつた。まあ各自が感想をもつたということで、この試みは成功だつたと思う。(栗本真吾・前後)

●議論することに満足をおぼえるのか、議論した気でいることに満足をおぼえるのか、この違いは大きいですね、きっと。君自身意見は変わりましたか?(檜本)

第三回の「救い」の議論はおもしろかつた。3回の中で一番深く話せたと思う。だが、一つ不快だつたのは、人の排反ばかりいつている人がいたことだ。議論をするには、やはり何かの糸口がないとできないわけで、その人の好き嫌いからの発言でも十分に意味はあるはずだ。人の意見や議論をけなす前に自分のそのテーマの感想を言え、という感想をもつた。けれども議論するときに必要なことは「自分の立場を明確にすること」、「今の議論はどこにあるのかを明らかにすること」ということがわかつた。(匿名希望・後期)

●自分がどういうスタンスで議論や他人に向き合うのかつて重要なポイントですよね。(檜本)

哲学的議論をやろう、という目標でスタートして、結局哲学的に深い議論をするには至らなかつたけれど、そこに至るまでの経過は楽しくやれ

ました。哲学的議論をするってどういうことなのか、というところから始まり、最後は遠慮なく自分の意見を言うことができるようになったので、この講座で得たものは大きいと思います。要は楽しければいいんじゃないのか!? どうもありがとうございました。(古川拓逸・前後)

◆議論することを「楽しむ」こと、自分の意見を臆せず伝えることは、確かにまず必要な第一歩だと思います。今回の講座では、そこから少し進んで、みんなが互いの意見をもう少し丁寧に聞きあうことができればもっとよかったなと思います。いつも議論を盛り上げてくれてありがとうございました。(高橋)

僕は『哲学的』ということがイマイチよくわかっていないだけなのかもしれないけれど、今回行った3回の議論にそこまでの高い水準を求める必要はないとおもった。(完璧を求めすぎるあまりそれ自体駄目になってしまうこともあると思う)  
(梶浦康平・後期)

●確かに、〈カッコよさ〉を追求しすぎると逆に〈カッコわるく〉なりますもんね。(檜本)

一部の人が議論の質を下げているような気もしました。僕自身、議論の当事者として参加できなかったような気も…。主催者サイドとしては、まだまだ環境状況を向上する余地があります。がんばって下さい。(小寺智也・前後)

◆これからも議論の“質”とはいったい何かということを考えながらがんばっていきたいと思います。今度機会があれば、観察者としてのクールな意見ではなく、ぜひ議論のまっただなかでの生の声を聞かせてください。(高橋)

もっと盛り上がった議論になると思っていたけど、沈黙が長くつまらなかった。議論だから誰も言わないようなレベルの高い発言をしなければと思い畏縮してしまった。前者の賛成の意見でもいいからもっと多く発言すれば、もう一つ上の議論ができたと思う。(鵜飼秀典・後期)



# 自然を感じ、対話する



**金**曜日6限目の〈臨床哲学ゼミ〉に〈環境班〉ができて2年がたとうとしています。今回のメチエでは〈環境班〉の試みを紹介したいと思います。このゼミでは比較的〈医療／看護〉や〈教育／対話〉といった領域あるいは場面にコミットする形で活動をするが多かったのですが「もう少し別の角度から臨床哲学を考えられないか」という思いから〈環境〉をテーマに数名が集まりひとつの班をつくりました。

**ま**ず〈環境班〉として環境にアプローチする際に注目したのが〈エコツアー〉ならびに〈自然観察会〉という活動でした。1年目はエコツーリズムにかんする資料を読むだけでなく、実際にコースを考え、下見に行くという活動や、一般に開催されている自然観察会に参加し環境班としてどのような自然観察会が提供できるかについて考えました。実際に参加し、いろいろ検討を重ねていくうちにある疑問が浮かび上がりました。それは「自然観察会は環境を考えるきっかけになっているのだろうか」というものでした。そしてそうした疑問に応えるために持ち込まれたのが〈哲学カフェ〉というキーワードでした。〈哲学カフェ〉とは、臨床哲学研究室が以前から行ってきた、人びとが対話を通して哲学する営みですが、自然観察会の中でそうした参加者同士が対話をする時間をもつことが、従来の自然観察会よりも参加者にとって環境に目を向けるきっかけにつながるのではないかと考え、そういう主旨の報告を行いました。

**2**年目の活動は主にこの「自然観察会の中に哲学カフェを組み込む試み」を実際に企画し、実行することにあてられました。場所は大阪府吹田市にある「万博記念公園」を使って7月と11月の2回開催しました。

**さ**て、以下では環境班の試みを具体的に報告したいと思います。「環境班としての自然観察会」はまだまだ試行段階という面があり本当に報告に値するのかわかりません。ただ、活動の内容や自然観察会に参加していただいた方々の声を2年間の記録として残すことによって、次の活動につなげていけたらと思います。

(文責 榎本直樹)



# 第1回自然観察会・観察コース



万博記念機構発行『エコパーク』より

## 自然観察会の反省

自然観察会後の金曜6限「環境班分科会」でのディスカッションを参考に、以下項目ごとに反省としてまとめた。

### ・時間配分

当日は暑かったこともあって、行程の最後のカフェでは参加者に疲れがみられた。夏の自然観察会では行程の途中にカフェを行うのがいいのではないか。

自然文化園の場合、閉園時間が17:00となっており、今回のカフェでは「テーマ」を決めた段階で時間切れとなった。下見をするなど綿密な下調べに基づいた計画が必要であろう。

2回目の観察会では下見を行い、始まりの時間を早めた。

### ・アトラクション

#### 自然のレクチャー

散策途中行われた「木の名称の説明」「常緑樹についての説明」「アメンボの語源」などは、新しい知識の提供という点では従来の自然観察会と変わらないが、漫然と散策するのではなく参加者の「気づき」をドライブするという観点から必要であろう。特に今回は、池でのレクチャーがカフェのテーマにつながった。

また、散策時に主催者が参加者の「気づき」を「拾う」ことの重要性も指摘された。

### 腐葉土の観察

腐葉土の中にいる生物の観察を行った。当日ルーペでの観察であったが、観察する対象に応じたツール（単眼鏡・双眼鏡・スコープ・・・）を準備する必要性の指摘があり、2回目の観察会では双眼鏡が用意された。



どんな生き物がいるかな？

### 音を絵に描く

絵を音に描くことによって普段気づかない環境にある様々な音を注意して拾うことができた。

絵を描いた花の丘は他の場所とは違い眺望がきいたが、中央環状線を走る車の音が聞こえ、日常的な世界から隔絶された場所ではなかった。また、花の丘は平面的な広がりを持つ場所ではあるが、高さの基準となるものがなく、聞こえてくる音の高さを表現することは難しかった。

このような反省を受け、2回目の観察会では散策の途中に観察林に面した場所で行った。

## ・カフェ

時間が少なく、テーマ決めまでしか展開しなかったが、参加者の「気づき」（池の底がコンクリートでできている）をうまく拾ってテーマ決めまで展開できたことはよかったのではないだろうか。

散策開始時間を早めたため、曇天から雨天になる生憎の天候にもかかわらず、2回目の観察



観察会後のカフェの様子

会では「対話」まで展開した。

## ・全体を振り返って

参加者が「身内」ということと初めての観察会ということから、準備期間が少なかったにもかかわらず、ある程度の成果が獲得できたのではないだろうか。暑い夏の午後で始めは気分も重かったのだが、散策が進むにつれて、参加者が主体的に共有する「場」を創造していったようだ。

そのように共有された「場」から立ち上がる「問い」は、自らのとは違う「考え」に根ざしたものであっても容易に共感を生み、自らの「問

い」としてリアリティをもって考えることができた。

ただし、今回の「気づき」は観察会が意図的に産出したものではないので、初対面の人たちが同様の行程を散策し、同様のアトラクションを行った時に今回のように「気づき」をカフェに接続することができたかは疑問である。この点に関しては、カフェに向けて「自然観察会を作り込む必要があるのか、偶然性に期待すべきであるのか」といった議論がなされたが、結論を得ることはできなかった。いずれにせよ、主催者の意図が透けて見えるような「作り込み」は避けるべきであろう。

自然観察会とカフェを接続するために参加者の観察会での「気づき」をファシリテーターが拾いあげ、それをもとに対話することで「多様な意見」を導き出す。そして、「多様な意見」による「対話」が参加者に「変容」をもたらす。その「変容」は環境問題に対する意識を根付かせるベクトルを有している。—このような流れが理想的な「自然観察会＋哲学カフェ」の流れであろう。

今回、はじめて「自然観察会＋哲学カフェ」を行うことで理想に向けて一歩踏み出すことはできたのではないだろうか。

（文責 辻村修一）

## 哲学カフェから考えたこと

### 「自然の〈こわさ〉とは何か」から考えたこと

榎本 直樹

7月9日(日)に万博公園で自然観察会を行った。2時間半ほど園内を観察して回った後、その感想をもとに哲学カフェ形式の話しあいを行なった。選ばれたテーマは「自然の〈こわさ〉とは何か」であった。またそれに付随して「〈安全な〉自然とは何か」というテーマも付け加えられた。この二点について考えた。

#### 自然の〈こわさ〉について

まずどういう時に自然をこわいと思うかを考えると容易に思いつく例として、火山の噴火や洪水といった自然災害がある。この場合〈どうしようもなさ〉という側面に〈こわさ〉とい



森の集音器で森の音を聴く

う言葉はあてられる。また〈大自然〉という表現にみられるような自然の〈壮大さ〉や、鬱蒼とした森の中に足を踏み入れたときに感じる〈神々しさ〉に対しても〈こわさ〉という表現はふさわしいかもしれない。全然関係ないが個人的には、原っぱに寝転がるのがこわい。レジャーシートを敷けば問題ないのだが直に座ったり、寝転がったりするのはこわい。これは背中の上ろに何かいるかもしれない服に虫がはいってくるかもしれないという心理的な恐怖に由来するみたいだ。でもこれらを取り上げるかぎり、自然のこわさとは人間の方にあるのであって自然がこわいというのではなさそうだ。

#### 〈安全な〉自然について

もうひとつ出されたテーマ(意見)に〈安全な〉自然というのがあった。確かに万博公園の中の自然は安全である。おそらくここで安全とは〈管理された〉ということから引き出されるのだろう。万博公園の管理者は〈スズメバチの巣はないか〉とか日々監視してくださり、あれば警告を出していただけるはずである。でも安全な通路があるきながら、安全な自然を見、私が感じたことは、管理されているのは〈自然〉ではなく〈人間〉ではないのかということ。「ここを歩きなさい」「ここから見なさい」「この点に注目しなさい」などすべてわれわれの行動は管理されていたように思われる。

## 〈自然〉について

〈こわさ〉や〈安全な〉ということから考えたこととしては、自然はあくまで〈自然〉であるということ。手つかずの自然であれ、人工の自然であれ、そこで生息している自然等にすれば、あくまで自然に（思いのままに、または普通に）生息している。人間がこわいと感じるのか、安全と感じるのかという問題は自然の側にはまったく関係がなく、問題は自然に向かい合う人間の側、またそれから何かを感じる人間の側にある。

そうすると、自然観察会においては、見る自然が本当の自然か人工の自然かということは問題ではないように思う（でも、こんなの本当の自然じゃないという意見は必ず出る）。なぜなら自然の側はあくまで〈自然〉だから（でも動物園だけは違うかも）。むしろ自然なものとしてある〈自然〉を、人間がどれだけ〈自然〉に見ることができるか、そこに問題はあるのだろう。

要するに、今回の自然観察会を企画し、参加をしてみて、自然観察会の見せる〈自然〉とは何かを考えるきっかけになったように思う。



## 「自然の恐ろしさ」について

辻村 修一

7月9日（日）万国博記念公園自然文化園において自然観察会と哲学カフェを行った。

カフェのテーマ決めの過程で、「自然の恐ろしさ」という観点から参加者各自レポートを書くこととなった。

以下、はじめに「自然」「恐ろしい」という言葉の概念を国語から考察する。次に自然文化園の〈履歴〉を辿った上で万国博記念公園自然文化園での自然観察会について考えてみたい。

### 「自然の恐ろしさ」について

#### —国語からの考察—

##### ・「自然」

まず、国語史的な見地から「自然」（じねん／しぜん）概念の変遷について考えてみる。

「自然」は中国から伝わった言葉であり、語源は『老子』にまで遡及することができ、老荘思想に拠った「あるがままの／人為に拠らない」という意味を持つ。

奈良時代以前に呉音としての「自然／じねん」が百濟人によって六朝時代の中国からもたらされ、後に「自然／しぜん」が奈良時代の後期から平安期にかけて遣隋使（もしくは遣唐使）によって唐から輸入されたが、音の違いがあるだけで、どちらも先に述べた老子を原初とする「あるがままの／人為に拠らない」という意味を持

ち、そのような概念を表現した。

このように日本語となった「自然」は〈状態〉を表現し、「自」は「自分」であり、和語にすれば「おのず（から）」となり、「然」は「しか（り）」であるため、漢字文化圏に包挙される以前の古い日本語で解釈すれば「おのずからそのようにある状態」という概念を表現する言葉であり、副詞／形容動詞としての使用頻度が高く現在のように名詞としては使用されなかった。

したがって、当時の「自然」には、現在のよ  
うな〈人間〉に対する〈自然物〉(nature)とい  
う概念は存在せず、〈人間〉の周囲に存在する  
個々の〈もの〉の総体を表現する〈天地〉〈万物〉  
が、〈自然〉(nature)に類似した概念を表現す  
る言葉であった。

人を含めた存在の総体を表現する言葉が〈天  
地人〉であったことから、天の万物・人・地の  
万物として〈存在〉があり、その〈存在〉のな  
かで人為によらない〈もの〉の状態を「自然」  
という修飾語によって表現したと、まとめられ  
よう。

このような概念を表現した「自然」が、蘭語  
の（英語 nature）の訳語として、〈天地／万物〉  
と同意で使用されたのは日本に蘭学が受容され  
た18世紀に入ってからである。（稲村三伯  
最初の蘭日辞典『波留麻和解』1796）

「自然」という訳語を与えられた蘭語の  
natuur の語源は、ラテン語の natura であり、  
さらに溯源するとギリシャ語の physis に至る。  
physis とは、人工の規則や慣習である nomos

の対義語であるため、自ずと生じた森羅万象を  
意味した。これにより「人為によらないものの  
状態」という概念を表現する言葉であった「自  
然」は、18世紀以降、「自ずと生じた森羅万象」  
という概念も同時に表現する名詞的な職能も得  
ることとなった。

したがって、現代の我々にとって「自然」と  
いう国語によって規定される概念は両義的あ  
る。

「自然／じねん・しぜん」という呉音・漢音  
にとして中国より伝来した修飾語としての品詞  
的職能をもち「あるがままの／人為に拠らない」  
状態と、18世紀以降の「自ずと生じた森羅万  
象」という名詞としての品詞的職能をもつ「自  
然」である。

例えば、「本当の自然」という文を考えた場合、  
「自然」という言葉のもつ両義性（自ずからあ  
る状態／自ずと生じたモノ）から、この文が表  
現する意味は曖昧とならざるを得ない。なぜな  
ら、前者に依拠すれば「原生的な自然」のみが  
「本当の自然」であり、後者に拠れば、〈作られ  
た自然〉であってもそれが自ら生成変化したの  
であれば、「本当の自然」ということになる。

卑近な例として〈ビオトープ〉にこの文を  
あてはめると、前者の「自然概念」では〈ビ  
オトープ〉は、「本当の自然」ではあり得な  
いが、後者では「本当の自然」という概念に  
適合する。つまり、国語史的観点から自然概  
念の成立過程をみれば、現在の「自然」が表  
現する概念は両義的であり、我々が「自然」

を考察する際にどのような概念規定に依拠するかで、表現する意味が違ってくるといえる。

#### ・「恐ろしさ」

「恐ろしさ」（「おそろし」）は心理を表現する「恐れる」（「恐る」）という動詞から派生した名詞である。また、先の「自然」が漢語であったのに対し「恐ろしさ」（「おそろしさ」）は、漢字とそれに付随する中国文化が輸入される以前からある古い日本語（和語）であり、「怖じける」（「おづ」）「怯える」（「おびゆ」）など、心理が〈身体の現象〉へと表象（感覚器官へアウトプット）される前の根源的な心理（主体が感覚した状況に拠って生じた心理）を表現する言葉であり、その意味は、「主体が自らの身に及ぶ危険性を感覚したことによって生じる心理」が原義となり、「畏怖」という漢語に対応する「敬い畏れる」という意味がそこから派生したと言えよう。

したがって、「恐ろしさ」には、「恐怖」と「畏怖」の概念を表現する言葉としての両義性が存



花の丘の風景

在する。しかし、先に概観した「自然」の両義が違う〈系〉にあるのに比して、「恐ろしさ」は、同一の〈系〉にある両義性を持つ。また、国語史的な変遷という観点から見た場合に〈読み／表記〉は変化したが、この言葉が表現する概念の変化を確認することはできない。

#### ・「自然の恐ろしさ」

以上のように国語の観点から「自然」「恐ろしさ」が表現する概念について考察してきた。

その結果、「自然の恐ろしさ」という文の表現内容を以下のように解釈することができるだろう。

- 1 「人為の関与しない状態への恐怖」
- 2 「自ずと生じた森羅万象への恐怖」
- 3 「全く人為が関与しない自ずと生じた森羅万象への恐怖」
- 4 「人為の関与しない状態への畏怖」
- 5 「自ずと生じた森羅万象への畏怖」
- 6 「全く人為が関与しない自ずと生じた森羅万象への畏怖」

このような解釈を前提とした場合、「恐ろしい」が心理を表現する言葉であるゆえ、この文の意味を規定するのは、この文の主語（主体）に拠る。

しかし、実際この文の表現主体が意味した内容が、上記の6つの解釈のどれかに完全に対応するということとはあり得ない。特に、「自然」

の両義性から主体が明確な表現すべき概念を前提としてこの文を使用するというのも困難である。また、ここでは「自然」に対する「恐怖」と解釈したが、「自然」を「恐怖」の〈原因〉とする解釈も不可能ではない。(例えば、「人為の関与しない状態だから恐怖を感じる」)

## 自然観察会について

### ・自然文化園の履歴

自然文化園は吹田市山田にある。山田の歴史を概観すると現在の自然文化園のあたりから、弥生時代の遺構が発見されていることから、少なくとも2000年前には〈人為の関与しない〉「自然」ではなかった。

また、『続日本紀』によれば、現在の太陽の塔あたりを中心とした七堂伽藍を持つ円正寺が存在したと伝えられている。よって、文献として考証できる履歴としては寺の伽藍が最古である。その後も耕作地としての田畑、孟宗竹の植林、など山田村の耕作地／里山として自然文化園の土地は、人工的に管理されてきた。万博開催時には各国のパビリオンが林立し、その後自然文化園として整備され現在に至っている。

このように履歴を辿ってみると、自然文化園は有史以来、常に人為によって管理されてきた場所であり、老子を原初とする「人為の関与しない状態」としての「自然」には合致しないが、個々の〈生物／無生物〉の総体としてある「自然文化園」を nature の訳語としての「自然」によって表現することは、妥当であろう。

### ・自然観察会について

今回の自然観察会に出席するまで、「本当の自然」は存在しないと考えていた私は「人為によらないもの」を自然と考えていたようだ。しかし、nature の訳語としての「自然」であれば、自然文化園も「自然」であり、自然観察会は文字通り自然を観察する会として成立することになる。

このように考えるようになったのも、自然観察会の後に行ったカフェでの「自然の恐ろしさ」を考察した結果であり、問いにおける言葉の吟味が概念の整理につながり、それによって「自然」に対する考え方に変化がみられたという体験をしたことになろう。

観察会におけるプログラムやカフェの内容、ファシリテーターの役割など、観察会後に開かれた分科会でこれから練っていく方向性が見えつつあることもあり、「自然観察会＋哲学カフェ」の方法が確立できるのではないかと期待している。

### 文献

『角川古語大辞典』角川書店1987.

『世界大百科事典』「自然」伊藤俊太郎 平凡社CDROM版2000.

『国語史言論』塚原哲雄 塙書房 1961.

## 自然の「こわさ」と「安全な」自然と「自然観察会」の運営について

川上 展代

自然に対する「こわさ」という言葉は、その規模の大きさやどうしようもできないという感覚、そして、わからない（予測できず、把握しきれない）という心理に関連して用いられることが多いように思う。ただし、「わからないという心理」による「こわさ」は、知識や慣れの程度によって、地域差、個人差があるような気がする。例えば、突然天候が変わるような山や、特殊な生態系の場所に行ったとき、こわいと感じる人もいれば、特別こわさを感じることもない“日常”として感じる人もいる。「こわい」が指すのは、自然なのではなく、主体の感覚や経験そのものであるように思う。

「こわさ」に対して、「安全」な自然について考えてみると、規模が限られていて、管理が可能で、把握されているというイメージが浮かぶ。万博記念公園は確かにこれらの要素を持っているように思われる。今回の自然観察会で、「安全な自然は本物ではない」という意見があった。自然観察会の運営という点から「安全な自然」について考えてみたい。安全な自然だからこそ得られるものもあれば、手付かずでしか得られないものもあるし、両者の間には与えるインパクトやそれに触れて人間が感じ取るものの違いがあるのは

確かだが、哲学カフェを伴う自然観察会を運営する上で、その違いが目的や効果に優劣の差を生むわけではない。今回の万博記念公園では、木々も適度に手入れや管理がなされ、私たち人間も「この木はなに?」「ここを見て」と行動を促すような一種の管理をされていた。それによって、私は「自然の見方」を知ることができた。手付かずの自然ではあれほど効率よく（歩く距離に対する目にした木の種類の数）見ることはできなかつただろう。その意味では、管理とは言っても必ずしもマイナスイメージではなく、「自然を味わうためのガイド」の意味も持っていると言え、それは手付かずの自然に出向いた時にも必ず役に立つことだろうし、逆に安全な自然に触れた後だからこそ感じられる「こわさの意味」もあるだろう。哲学カフェを絡ませた自然観察会では、人間が自然に向かいあった時に各々で何かを感じることを、それを言葉にしてみることを、そしてできたら日常での生活に何かをもたらすことが大事なのであり、それに対して十分な機能を持つ二つの「自然」は、共に本物と言えるだろう。違いがあることを明確に意識して、むしろその違いをからくりとして活かすようにして観察会を企画していくこと、観察会の内容に応じた哲学カフェの進行方法について方針を定めておくことで、観察会の幅が広がっていくはずだと思う。

## 怖いことと驚くこと

紀平 知樹

「万博記念公園の自然は、人工的に作られた自然であって、ほんとうの自然はもっと怖いものではないか」。そんな言葉から、わたしたちの対話は、一つの転換点をむかえたようだった。しかし、公園の閉園と共に、わたしたちの対話もお開きになった。この発言に対して、一定程度頷けるものではあるが、しかし全面的に首肯するというわけでもない。

年に数度は、山で人が遭難した方のニュースが流れる（最近も焼き肉のタレをなめることによって無事生還できた人のニュースが世間を賑わせていた）。そしてそのたびに「自然を甘く見てはいけない」というコメントが寄せられる。確かに、たいした文明の利器ももたずにひとりで山（自然）の中に分け入っていくことは、たったひとりで自然と対峙することになり、人間の劣勢は日を見るより明らかであろう。私も、西表島のエコツアーではじめてシーカヤックにのって海に漕ぎだしたとき、ちょうど台風とぶつかってしまい、命からがらとまではいわないまでも、へとへとになりながら港にたどり着いたことを思い出す。漕いでも漕いでも風に流され、目的地に近づくことができず、終いにラダーを操るワイヤーを切ってしまい、ガイドさんのシーカヤックにひっばってもらいなんとか港にたどり着いたのだ。確かに自然は怖い。

しかし身の危険という意味での怖さならば、自

然も日常生活でもそれほど違いはないのではないだろうか。自然の中で遭難する確率とふだんの生活の中で何らかの事故に出遭う確率とを比べてみたら、後者のほうがより危険なのではないだろうか。正確な比較ではないが、山岳警備隊のある長野県警のHPで交通事故件数と山での遭難者数を比べてみると、後者は56万人の登山客に対して192人の遭難者があったのに対して交通事故は人口2196114人に対して17585件である（ともに平成17年度）。単純に比較することはできないかもしれないが、この数字だけから見ると、より怖い（危険）なのは、自然ではなく、社会のほうではないだろうか。わたしたちの社会への信頼や安心感が、社会の危険を覆い隠してしまっているのではないだろうか。

身に危険が及ばなくとも、自然は怖いともいえ



この木はなんの木？

る。たとえば子供の頃（いや、大人もそうかもしれない）、夜にひとりで森の中に入っていくにはかなりの勇気が必要だろう。昔から自然とは人間以外のもの（他の生物や、おとぎ話に出てくるような怪物等々）の住むところである。あるいは、木々の間を歩いていたら、とつぜん顔に蜘蛛の巣が引っかかったという経験はないだろうか。引っかかった瞬間、びくっとするとともに、えもいわれぬ恐怖が背筋を走り抜ける。まったく予想しないものが突然（予想していないのだから、当然いつも突然なのだが）出現する。自然とは、他者が棲み、他者と出遭う場所なのかもしれない。

この点が、わたしたちが住み慣れている社会と自然との相違かもしれない。わたしたちが暮らす社会は、その日常性ゆえに、ある程度予測可能であり、なじみ深いものである。そのことによって社会に対する信頼と安心が生まれてくるのだろう。そしてこのしぜんに慣れ親しんだ私にとって、自然は予測不可能な部分が大きく、その予測不可能性の自覚が、怖さを引き起こすのではないだろうか。しかしそれは、社会の中でおこる予測不可能な出来事に対して、身が縮むのとなんら変わりないように思われる。違いは、どちらがより、身が縮む頻度が高いかということにすぎない。

自然の予測不可能性こそが自然の怖さである。自然の予測不可能性は、わたしたちに驚きの体験をもたらす。プラトンがいうように、哲学が驚きからはじまるのだとするなら、住み慣れた社会から、慣れない自然に足を踏み入れることは、哲学のきっかけになるのかもしれないと考えた。

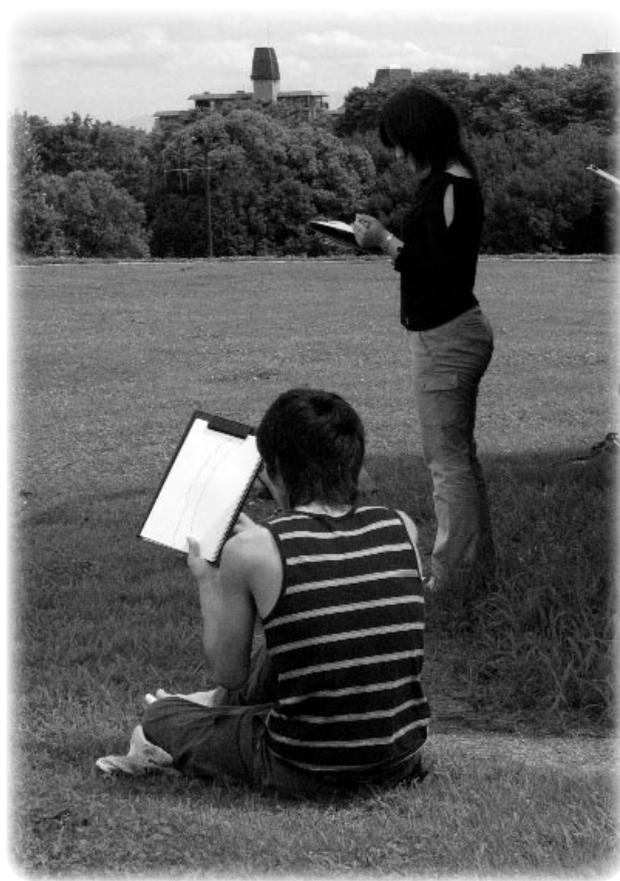
## 自然観察会の感想

大塚 尚徳

万博記念公園での自然観察会に参加し、当時多少の不満はあったが全体的には成功と言えるのではないかと今は感じている。

多少の不満というのは公園内を歩いているときに感じた人工的なものへの反発だ。最後のディスカッションで「本当の自然じゃない」という意見が出たときもそれに賛成した。

しかし自然観察会全体が意味のないものだと感じたわけではない。風にゆれる草の丘の上で地面に座って、じっと周囲の音に耳を傾けるという体験をしたが、それは驚きと感動を覚えるような



自然の音をスケッチ

ものだった。また、観察会が終わったあとのなんともいえない爽快感や癒されたような感じは、やはり万博記念公園の自然と接したことではじめて得られたものだと思う。

当時は「自然は大事だ」と思えるような根拠を求めすぎていたと思う。それを見つける舞台としてはあまりにも人工的で意図的な自然に不足を感じたが、そういう根拠を追い求めなければ十分にすばらしい観察会だった。

「自然と接するなかで自然について考える」という目的だけならこの会で十分達成できるし、それ以上を求める必要はないと思う。自然の大切さは自分とそれとの関わりについてきちんと把握することで知ることができるのであって、あのとき「本物の自然」と考えたようなものに直に接しなくても大切さを感じることはできるはずだからだ。

観察会の体験でも感じたのは「やってみなければわからない」ということで、直後の感想とその後しばらくたってからの感想もかなり変わった。臨床哲学が「見切り発車」で歩きながら考えるものなら、その意義について先に理論立てて考えようとするより、いかに活動を継続して行っていくかということにまずは力を注いで取り組んでいくべきだ。



# 自然観察会＋哲学カフェ 参加アンケート

2006/11/26(Sun)13:00～

## 自然観察について

### 1. 自然観察をした前と後で、何か変わったことがありましたか？

- ・ 自然を感覚的に感じると（物にしる音にしる）複雑にできていることに気づきました。
- ・ 木の見たと触りごちの違いが想像以上にあったのにおどろいた。しかし、それが（違い）少しずつなくなっていくのにも驚いた。
- ・ コースの中で見切れなかった分を見たいと思い、他のこのような施設（？公園？）にも興味があった。
- ・ 雨の中の自然にふれてよかった。
- ・ 鳥は常緑樹に集まる（？）ことを知りました。
- ・ 「対象化」「一体化」といった哲学的関心からも考えられるようになった。
- ・ 木の幹が意外とざらざらであることに気づいた。木もきめ細かくて環境と相互依存していることを発見した。
- ・ 木として漠然と、色彩的にしかとらえていなかったものが、個体として認識するきっかけとなった。

### 2. 観察会の時間配分はどうでしたか？

- ・ 適正でした。その後の哲学カフェがもう少しできればというところでした。
- ・ 多少「もうちょっと見たい」という気持ちが残りつつ、しかし、そういう気持ちがまた自分でゆっくり見たいとおもったので、早めに進んだのは良いと思う。配分は良かったと思います。
- ・ もう少し自分で勝手に色々入りこむ余地のあるスピード（ゆっくりめ）で進んでほしいとも思ったがそれをあえてしないことで上のような欲求不満と次へのバイタリティが生まれるので、今回くらいでいいと思う。
- ・ 雨で予定が変わってしまった。
- ・ 前回よりも歩く行程にメリハリがあって良かったと思います。天候に応じて臨機応変で良かったです。
- ・ ゆるやかで良いかんじ。

- ・雨が降ったので少し大変でした。
- ・カフェの時間がもう少し長くてもよい。
- ・ 適当。

### 3. 改善した法がいいと思うところがありますか？

- ・ 地図があればおもしろかったかもしれません。
- ・ カフェはもっと時間とってもいいと思いました。
- ・ もっと実践の場が欲しい、クライシスが少しくらいあってもよいのではないかな？
- ・ 特になし。絵を描く時間は、時間の長さを変えてみると結果や意気込み（短時間で音を集めようとする etc）もかわってみえるかも。
- ・ 会を行う場所をいろいろ変えてみると反応が違っておもしろいかも。
- ・ カフェの材料となるような体験をもう少し増やしても良いかと思います。
- ・ 観察する木の種類をもう少し精選するとか、他の感覚（？・味覚）も動員する工夫をしてみたらどうか。
- ・ 対象物との距離。まわりのものも一緒に比較すればいいのではと思います。
- ・ 今回はこれでいいと思いました。

## 哲学カフェについて

### 1. 観察会中に哲学カフェで話し合いたいことがありましたか？

- ・ 観察と一体化 / それと悟性のかかわり。
- ・ （哲学カフェの導入部に少し話したかったような・・・？）木についての紙を何となく恥ずかしくて隠してしまっていたが、他の人の感覚（においや音なども）を共有したいという矛盾した思いもあった。
- ・ 自然と人間の理性について。
- ・ 観察会中に、花を摘んでもいいですか？等
- ・ 割と話せました。
- ・ （一本の木が幹分かれして複数の個体のように見えるとき）「個体（のアイデンティティ）とは何か」

## 2. 対話を通して新しい発見はありましたか？

- ・ ありました。
- ・ 「一体化」のとらえ方の多様性・・・
- ・ 一体化とは何か、再思考できた。
- ・ 一体化とはなんなのかという謎が深まった。
- ・ 一体化ってなんですか という気持ち
- ・ 哲学的な新たな視点
- ・ 何かと「接する」とか、ものの「アイデンティティ」について発見があった。
- ・ それぞれ個人の意見・感覚の相違。
- ・ はい

## 3. 自然観察会とカフェ全体の観想

- ・ 楽しめました。自然保護との関連がよくわからなかった。
- ・ カフェの比重を増やしても、成立すると思います。
- ・ 今度は実践的にごみ拾いもあっていいのではないか。
- ・ 寒かったけど楽しかったです。お疲れ様でした。
- ・ わりと楽しかったのは、道中話せる気楽なメンバーだったかしら一般にやる時がとても不安。
- ・ 寒かったです。でもカフェに至るまでの過程と、カフェに入ってから展開はとても良かったと思います。
- ・ 当然だが天候に左右される。
- ・ 言葉として具体化することで、あやふやな感覚が具体的に認識しやすくなりました。
- ・ よかったです。

## 哲学カフェの記録

### 〈何かと一体化するとはどういうことか〉

途中から降り出した雨がだんだんときつくなってきたので、屋根のある休憩所に腰をおろし、そこで哲学カフェを行うことにしました。椅子が8人分



しかなく、何人かの方は立ったまま参加ということになってしまいました。

さて、このカフェはふだん街のカフェで行われる哲学カフェとは違い、それまで実際に行った自然観察を素材に対話を行うという特徴としています。対話はまず参加者の感想を聞くことから始め、参加者がそこから問いをつくり、その問いについて話し合うという順序で進みます。全体で1時間弱というところでしょうか。ではその一部をのぞいてみましょう。まず、進行役がそれまでの行程を簡単に振り返り、自然観察会というものに初めて参加した人がいれば感想を述べてほしいと要求しました。

#### 〈感想を出し合う〉

「きちんとした道があったのが意外だった。万博ということである程度覚悟していたけ

ど、もっとディープなところに行くのかなという想像がありました」

「ディープでないというか、自然でないというのは自然観察会にとってどう？」と進行役。「ムードとか、態度に関係してくるんじゃないかな」

すると別の参加者が、

「ムードって？例えばあんな野球イベントの騒音が聞こえないとか？」

「そうそう。周りもうるさいし、自分がしゃべってうるさくすることに気がつかわなかったし、見るときの見方も違ったような気がする」

なるほど、まず出されたのが、自然観察にはムードが必要かも、という感想でした。さらに別の参加者が、

「観察って何なのかですよ。五感ってあるでしょう。今日やったアトラクションでは視覚、触覚、聴覚は使ったけれど、あと嗅覚と味覚もやったらどう？」というご指摘。

ここで、進行役は「食うのはちょっとねえ」という何人かのつぶやきを聞きつつ、今日はやらなかったが他の企画で嗅覚を使ったものを考えていたことを伝え、その参加者に〈観察〉ということにどういうイメージをもっているのかを尋ねた。

「対象化する、という感じ。沈黙して、対象化すること」

ここから〈対象化〉という言葉をめぐる、いろんな人が発言されました。

「対象化ということでおもしろかったのが、木を触りにいく時に、下の苔とかは踏んでいるけど気になっていなかった、ということも隣にいた彼が滑った時に気づいた。つまり苔は対象化されていなかった」

「おもしろいですね。自然に触れるという時点で、すでに選り抜いているということですよね」

「視覚だけじゃなく、音を聞くときにも、最初は鳥の音ばかり気になったが、車の音とか人工的な音がどんどん気になりだして」

「目を閉じて注意深く聞いてみたら何の音か全然わからないものも聞こえてきて、・・・後で考えたら〈葉っぱを水がたたっているんだな〉とわ

かったり。これは対象化というよりももっと広くすべてに自分の聴覚を解放していくという感じかな。さっきの木に触れるということも、限定せずにもっと広く捉えてみたら、苔に触れる人も出てくるだろうし。対象を限定してしまうのか、感性にまかせるのか、どちらも楽しいと思う」

この一連の発言は〈観察会をどう進めるか〉を考える上で面白い視点だと思います。他に、木の名前を知ること（覚えること）についても感想が寄せられた。

「木の名前ってどこまで大切なのかな？私は

覚えたいし、名前を知ることその植物や木との接触が密になるような気がする。でも他方で、自然な、より率直なふれあいを阻むことになるのかな、という気もする」

「それに関しては、いくつか自然観察会のやり方に種類があるみたい。名前や由来はあまり教えない。教えると木を見なくなるので」

「固定観念ですか」

「そうですかね。でもそれにも問題ありそうですけど。つまり感覚を重視してしまうと、感覚だけになっちゃう。自然が好きで終わってしまう」

「それで終わってはいけないの？いけないとすれば、どういうのを指すの？」

「さあ」

以上からもわかる通り、多くの感想が寄せられた。でも、ここでの狙いは感想を言うことだけではなく、参加者が問いを立て、対話することです。その旨を進行役が参加者に伝え、いったん仕切り直しをします。進行役が

「今述べられた感想を念頭において、〈自然〉を考え、〈環境問題〉について考える時に、どういう点に注目することが重要になってくると思いませんか」

と問いかけ、みなさんでテーマを設定し、問いの形にしてくださいとお願いしました。



〈問いをつくる〉

まず、最初に出されたのは〈自然に出会うとはどういうことか〉というものでした。

「最初は作られている感じがして、距離を感じたが、観察するという過程を通じて、逆に自然にふれることができた気がする」

「観察って何なのか、という視点もありますよね」と進行役。

「そうですね、観察ということで自然に出会うことにつながってきた気がするんです」

ここで進行役はこの発言者に〈出会う〉か〈観察〉のどちらを問題にしたいのかを尋ねたところ、その方は他のみなさんに判断をゆだねられました。

さらに別の参加者は、感想の中で出てきた〈対象化〉の話の念頭におきつつ〈自分と自然のかかわり方〉に注目します。その参加者と進行役のやりとりを少し紹介すると、

「観察することで対象化すること、つまり自分が自然とどうかかわっているのかを考えることと、触るという感覚から、私が自然というものをどう感じたのか、という二つの方向性があると思います」

「どちらかというどちらに興味がありますか」

「私が気になるのは、観察することと感覚することの違いに興味があります」

「問いにするとどうなりますか」

「感覚的に自然を感じるのと、観察によって

自然を知るのとでは、どちらが自然に近くなれるか」

「もう少し短くなりませんか」

とここで別の参加者が、前者を〈感覚的一体化〉、後者を〈対象化〉と呼んではどうかという発言がなされました。また、最初に自然との出会いを問題にした参加者は、

「私が〈出会う〉と曖昧に言ったのは、観察と一体化が分けられずに錯綜しているだろうと意味合いだった」

と付け加えられました。ここからいろんな発言が飛び交い、錯綜しそうだったので、ある参加者の「〈一体化〉がよくわかんないんだよなあ」という発言を受け、進行役が〈一体化〉について議論しましょうと提案し、受け入れられました。

そして参加者のみなさんによって作られた問いが〈何かと一体化するとはどういうことか〉でした。ここで〈自然〉でなく、〈何か〉としたのは、話を自然に限定しないという目的からです。

さてさて、この報告も長くなっておりますが、再び仕切り直しです。



〈問いをめぐって対話をする〉

テーマが無事決まり、進行役が〈何かと一体化するとはどういうことか〉について考えることが、少なくとも環境や自然について考える一つのアプローチとして必要になってくる、という趣旨を説明し、自然に関係なくとも普段の生活の場面でそういう事柄がないかということに参加者に問いかけました。

ある参加者がコンタクトレンズと眼鏡を例にあげました。

「コンタクトを初めてつけた時は涙がボロボロ出たが、慣れてしまうと違和感がない。眼鏡もたまにそうで、服を脱ぐ時に外すのを忘れていて服と一緒に飛んでいくことがよくあります。この時私は眼鏡と一体化しています」この発言に対して、「私は眼鏡をかけたままコンタクトを入れそうになった」とか、「コンタクトをしたまま眼鏡をした」といった発言が続きます。

「でもそれは〈慣れ〉じゃないですか」と別の参加者のつつこみ。

「一体化という表現がこの場合正しいかどうかですよね。慣れてて区別していないとか違和感がないことは確かだけど、一体化と同じかどうか」

さらに別の参加者は感想での発言にもどり、「先ほど、誰かが自然をずっと見てると言葉が浮かんでこなくなる、と仰っていました。(公園に) 入った時はいろいろ考えても、じっ

くり見ていくにつれて、言語化する、表現することがなくなっている。それも一体化かな、対象化というよりは」

「ということは、一体化するということは言葉による分節化の対極にあるということになりますよね。分節化するというのは、結局悟性とかが働いていて、それだと自然と一体化できません、ってことでしょ」

「悟性が働いていたら、自然と一体化でないんですか」

「どうなのでしょう」

「悟性が働いている時点で一体化できないのか、悟性の働いている状態のことを一体化していない、と言うの？確かに、何かを対象化して考える時には悟性が働いていて、それが一体化していないというのはわかるんだけど、例えば、私が自転車にのって走っているとき、慣れている道だと、まったく街や道のことを考えずに考え事をしていて、気づいたら目的地についた、という場合。これってただの慣れ？」

「西田幾多郎の〈純粹経験〉ですよね。純粹経験というのは一体化していると同時に悟性も働いている。微妙ですが」

ああ難しい、さらに寒いので「あと5分くらいで終わりますね」と言ってしまった。でも参加者のみなさんは自転車の例から離れたくないようです。

「意識していないというのは、一体化ということになるんでしょうか。例えば、〈榎〉の名前をなんだろうって考えているときは〈榎〉のことしか頭になくて、下にドングリがあるとか鳥がいてということは全部忘れていたとして、でもだからといって私が〈榎〉以外のものと一体化していて、そして下をみて「あっドングリだ!」と思った瞬間に対象化して一体化からはずれるというのは、それは違う気がしたんですね」

「さっきの、自然を見てて考えが浮かばないというのは、コンタクトや自転車の例とは違うと思う。引き込まれているから悟性が働かないということだと思うんです。引き込まれるということと、慣れは別の話じゃないですか?」

この話はさらに〈苔で滑った例〉や〈バナナの皮を踏んだ例〉などを使ってさまざまな発言が出ました。別の視点としては、皆が使う〈自然〉という言葉が、植物などの〈自然〉なのか、意図せぬという、つまり仏教用語でいう〈じねん〉に近い意味で考えるのかといった指摘もあった。降り止まぬ雨の中にもかかわらず、議論は白熱する一方でしたが、あまりに寒そうにしている方もいたので、

「じゃあ、この辺で」と特にまとめもせず終わりにしました。もちろん、問いに対する結論が引き出されたわけでもありませんが、〈自然〉とか〈環境〉を考える上で興味深い論点

も出されていたように思います。」

報告は以上で終わります。しかし、報告をまとめるにあたっての若干のお断りをしておきます。この報告は当日進行役をした榎本が行いました（テープおこしは川上さんにいただきました）。まとめるにあたって進行役以外は発言者を特に明記しませんでした。それはこの報告を読んでいただく方にできるだけ〈発言〉に注目していただきたいという意図があつてのことです。また発言はできるだけそのままに近い状態を心がけましたが、こちらの判断で若干の加工を加えました。

（文責 榎本直樹）



## 第二回自然観察会の感想

辻村 修一

2回目の観察会、散策の途中で風が吹き、木の葉が風に舞った。

どっどど どどうど どどうど どどう

青いくるみも吹きとばせ

すっばいかりんも吹きとばせ

どっどど どどうど どどうど どどう

『風の又三郎』を想起した。40年以上生きてきて初めての体験だった。

「本当の自然は存在しない」と思っていたが、前回の観察会でのカフェのテーマ（「本当の自然とは」「自然の怖さとは」）から国語史的に自然概念を整理し「自ら生成するものも自然概念に当てはまる」と思うようになった私にとって、今回の自然監観察会は私を圍繞する人工物以外のものを全て自然のものとして観察することができた。

〈樹皮の感覚をオノマトペで表現する〉

散策の途中、樹皮をさわってオノマトペで表現するアトラクションを行った。オノマトペは身体感覚に近い言語であろうが、自分の感覚を言語化することの困難さを思い知らされる体験となった。ボキャブラリーの貧困さだけに起因

するのではないと思うのだが、その場で書き留めたオノマトペが、今樹皮に触れた感覚を上手く表現できているとは決して思えないし、その言葉を後に読み返してこの感覚を再現できるとも到底思えなかった。

もしも、樹皮の感覚を言語に定着させる作業を課せられたらオノマトペではなく、説明的な言語表現を選択するであろう私は、言葉によって自然を分節化する観察者としての立場でなく自然と関係を持つことができないのだろうか。

〈私〉と自然との〈遠さ〉ばかりでなく、〈私〉と〈私の身体〉との〈遠さ〉を実感させられたアトラクションだった。

〈音を線で描く〉

当日、京都パープルサンガとガンバ大阪の試合が行われていた。サポーターの応援の太鼓の音が聞こえてきたが、その音は記憶としてある映像を喚起した。また何種類かの小鳥の囀りが聞こえたが、知識としてあったヒヨドリ鳴き声だけは峻別することができた。ヒヨドリという言葉も映像を持っている。聴覚を特化させたアトラクションを体験することで、他の感覚より視覚が圧倒的に優位であることを再認識させられたことは興味深い体験となった。このように視覚の優位性を感じていたときの〈私〉は、自然の観察者としての〈私〉であったが、音を聞くことに没頭するにつれ、音を聞いている〈私〉、その音を絵にしている〈私〉、絵を描く色鉛筆の音を立てている〈私〉、その音を来ている〈私〉

と〈私〉が私から離れて、偏在しているような妙な感覚を感じていた。この感覚は前回の自然観察会で同様のアトラクションを行った時には感じなかった。ただ、前回の絵には絵を描く〈私〉が描き込まれていたの、同じような感覚を持っていたのかもしれない。

この後カフェで「何かと一体化するとは」というテーマで対話がなされたが、このような感覚が何かと一体化するという感覚のだろうか。日常では体験できない面白い感覚だった。

#### 〈二回の観察会に参加して〉

私が単純なのかもしれないのだが、一回目も二回目も「変容」を経験し、日常の中でそのことを咀嚼し直すことすらあり、個人的にはとても面白い経験をする事ができた。

参加する前は少し気が重いのに帰宅するときには参加してよかったと思える。このような経験を参加者全てが獲得できるようにこれからも「自然観察会+カフェ」についての検証を重ね、作り上げる作業に参画したいと思っている。



観察メモをとる参加者たち

お誘いを受けて自然観察会へ足を運んだのは十一月も末の、低くたれ込めた雲が印象的な肌寒い日だった。参加者の中では、私は比較的自然観察会にも哲学カフェにも馴染みのない部類であろうと思われた。そのため少々緊張気味で集合場所に臨んだものの、自然観察という普段の自分にはあまり似つかわしくもないアクティブな響きと、中学校卒業以来久々の遠足気分を味わう機会から高揚していただけたかもしれない。

前半の自然観察会は、私が事前に抱いていた観察という言葉の学習的なイメージとは少し異なり、メインは「散策」に近かった。難しい専門知識や事前学習が要求されることもない。木の幹を見て、触ってその質感を言葉にしてみるなど、日常自分が「きれいだなあ」などと漠然と自然に対して思っている内実を少し深く見つめ直せるような時間だった。いくつかの木に触れながら、視覚と触覚は時に互いを裏切るような感じ方をするのはなぜだろう、と考えたりもした。こうやって色々と思いを起こさせるのも哲学カフェへの布石か？とも思ったが、それは後に哲学カフェが控えているというプレッシャーがあったためかもしれないし、普通自然観察会の参加者がそのように考えるかどうかは分からない。しかし哲学の諸問題に必ずしも引き付けなくても、自然に触れる機会を得た人が「哲学っぽい思考」を多かれ少なかれ、無意識のうちにしてしまうということは大いに考えられる。「哲学的思考」と書くのは何

だか気が引ける程度の、ちょっと普段とは違う視点を得て楽しむということをお願いのだが、それは意図的に組まれた企画手法に左右されるというよりは自然の方にそうしたものを呼び起こす力が含まれているのだろう。機会さえ与えられれば私達はいつでもそれに気づくことができる。要するに自然とは「哲学っぽい」？しかしそんなことは当たり前の気もするし、あまり哲学哲学と軽々しく口にすると、そもそもこの場合自然とは何ぞやと掘り下げなくてはならないような強迫観念にとらわれる。万博公園まで来てそんなことを考えるのも、とっていると、白鳥が見られるスポットに着いてはしゃいでいるうちにそんなことはすっかり忘れてしまった。

後半、哲学カフェでは自然を観察するというところを改めて見つめ直しながら、自然との一体化、自然の対象化など今日の振り返りにも直結するような対話が行われた。参加者の発言を聞きながら、自分が今日園内を歩きながら思ったことを整理することもできたと思う。観察会中に個人が抱いた考えを、帰路一人で振り返るだけではもったいない。

初めて万博記念公園を訪れたことも含め、色々楽しい思い出ができた日だった。しかし浅慮にも薄出のカットソーにニットを羽織っただけという格好だったため雨に降られてカフェの間に風邪をひきそうになった。部屋か学校に閉じこもりがちな生活では実感しにくい自然の脅威を身をもって知り、次回があれば季節と服装には注意して臨みたいと思う。

「自然には敵わないなからしかたがない」とはプロ野球が雨で中止になったときに、選手や監督がよくいう言葉でしょうか。彼らがぼやきながらベンチから引き上げていくイメージが、その時僕のあたまの中でくりひろげられていたかと思います。足下の悪い中歩き、屋根のあるところへ逃げのように走り、そして哲学カフェへ、という流れは当日のそれまでのどんなプログラムよりも自然（自然とは何か、はさておき）を感じさせるものでした。今日という日に対する自然界からの皮肉などと考えたりもしました。この自然はもろくもはかなくもなく、都会の隅においやられるわけでもなく、大きな顔をして靴下の中に侵入して、わたしの気分を左右させました。

思えばそれは自然観察会だから体験できたというわけではなく、日常の雨降りの日の一コマでもありえたことかもしれません。雲から滲むにぶい光や、風の音や、雨の色にも心奪われる、という気分になれるのはやはり自然観察会という特



別な一日であるからなのでしょうか。あるいは万博公園という緑豊かな場所であるからでしょうか。そうかもしれないし、そうじゃないかもしれない。その時の哲学カフェは、自然とは何かがまた一段とわからなくなるいい機会になりましたが、僕にとってのなによりの収穫であったのは、平凡な日常からでも自然の豊かさはわいて出てくるということが再確認できたことでしょう。

自然観察会に参加する動機や考え方は様々あるでしょうが、この度の僕のように、ただ休日の退屈しのぎにというのもやはりありなのでしょう。少なくともあの日の僕はその心持ちがしっくりきたように思います。散歩をする時は、いろいろ何か考えたり別に考えなかったりしますが、何かそういう感じで僕は参加したいです。万博公園というちょっと奇妙な場所は、自然について深く考えさせられるという点で自然観察会に適しているのかもしれませんが。ただ難しいことはなんともいえませんが、お年寄りがのんびり歩いたり、家族が楽しそうに笑っていたり、冒険に向かうような子どもたちがいたり、・・・そんなことを見ることができてよかったです。きわめて普通の光景か。



自然観察会について語ろうと思えば、「自然」とは何か、「観察」とは何かを自明にしておくわけにはいかない。「私たち—観察する—自然」という関係性を問う。それとも、観察することの中で、いわゆる客体も主体も再吟味されるのかもしれない。だとすると、「観察する（私たち—自然）」と捉えるべきか。さらに、自然と接する中で私たちの主体はもちろん、観察するという行為なしし出来事自体が精錬されるのかもしれない。

知っている人も多いだろうが、ダニの世界は人間の世界とはまったく違う。第一目が見えない。執念深く何年でも樹上に潜む。通りかかる哺乳動物の気配をかぎつけ、落ちかかって皮膚から血を吸う。嗅覚と温覚と触覚だけでダニは生きている。

ダニの話をしたのは、環境をどう受けとめ、何を受け入れるかには種差があることを改めて確認したかったからだ。人間は多くを視覚に頼っている。もっとも、ほんとうに見えているのかどうか怪しいことも多い。毎日通りかかる街の隅々は私たちの目にしっかりと入っているか。社会的・文化的な決まりごと・約束事の景色をしか、私たちは見えていない。

だから、自然観察会では、「見れども見ず」の惰性を正し、自覚的に（注意を集中しつつ）自然と接するやり方を探るのだろう。もっとも、理屈をいえば、自然の美しいところに行き、注意を集中すること自体、非日常の行為であり、ある意

味で「不自然」である。「観察」とは対象化することではないのか。それで自然を本当に「感じ」、「体験」できるのか。自然観察会は或る種のフィクションを作り出そうとしているのではないか。まあ、それでもいいと私は思う。

自然観察会への参加は、初めての経験だった。木の肌を撫でて特徴をいう。これは難しかった。皮膚感覚が十分に鋭くないのだと思う。語彙（なめらか、ごつごつ、など）も致命的に不足している。それでも幹の凹凸を探り、どこで組織が乱れているかを見て、環境と折衝し、障害を乗り越えながら生長する木の「気持ち」に多少は迫れた。目を閉じて聞こえてくるものを「線」で描き分ける。この試みも悪くなかった。言葉以外のもので環境を表現してみるのは有効だろう。公園の乗り物の音、サッカー場から聞こえてくる歓声を聞き分けるのは、自然ではなく、文化ではないかとも思った。けれども、文化の産物も自然物と同等に聞き取り、「線」で表現できるというのであれば、それに同意する用意はある。

観察会後の呑み会も楽しかった。観察会における集中との落差は、仏教で言う「精進」と「精進落とし」の関係に似ているかもしれない。その意味では、今後もぜひ呑み会とワンセットで開催していただきたい。

## 2回の自然観察会をふり返って

樫本 直樹

「意外といけるんじゃないの」、2回目の自然観察会をおわって率直にそう感じた。自然観察会の中で哲学カフェを行うということについてである。巷で行われているいわゆるふつうの自然観察会では、自分が何を感じ、何を考えたのかをあえて口にするのは少ない。もちろん参加者同士や主催者（引率者）と会話はするし、感想を述べあうことはある。でもそこで行われているのは、自然について知っている（詳しい）人が知らない（詳しくない）人に教えるという、一方向の情報伝達である。それに対し、環境班の考えている自然観察会では何かを教えるという気はさらさらしない。環境班が重視するのは、参加者がまさに今見てきたものから感じたこと、考えたことを実際言葉にし、他人に伝えること、そしてその言葉をきっかけとして、そこから考えられることを参加者全員で考えるというプロセスであるといっているように思う。

一回目の哲学カフェでは、〈本当の自然〉ということに、二回目のそれでは〈自然との一体化〉ということに参加者は引っかけりを感じ話しが展開した。もちろんその話し合いによってその



引っかけに対して何か納得した答えが得られたとか、それによってその後の行為に変化が生じたとか、そういうことはなかったかもしれない。でも、〈本当の〉〈自然〉〈一体化〉というふだん何気なく使っている言葉でイメージしているものが他人と食い違い、自分がそれらの言葉で何を言おうとし、また何を前提にしているのかを考える／考えさせられるという場があるということがとても重要だと思った。

また、この哲学カフェは自然観察会の中に位置しているけれども、必ずしも自然について話さなければならないというものではないということも重要であるように思った。確かに、出発点は感想や感覚の表明であったとしても、他人との意見の食い違いや問いかけをきっかけとして、例えば〈人を理解するとはどういうことか〉が問題になってもいいし、〈環境保護〉そのものが問い直されてもいい。つまり、哲学カフェが自然観察会の中にあることによって、それは自然について考えるために一旦立ち止まる場として、そして自然を通して考えたことを日常生活に接続する場として機能するというひろがりをもつ。またそうした場があることで、それまで自然観察会に参加したことがない（興味を示さなかった）人を取りこむということになるかもしれず、そういう意味でも従来の自然観察会という活動の幅をひろげる可能性があるように思う。

実を言うと（すでにばれているだろうが）、この自然観察会はまだまだ試行段階であり、一回目は環境班のメンバーで行い、二回目はほぼ臨床

哲学関係者で行った。比較的議論に慣れた人が多く、よいところだけを見て私がいけると早合点しているだけかもしれない。今後はより一般の人びとの割合をふやして開催していくことになると思うので、私がこの自然観察会に寄せている期待のようなものは、ガラガラと崩れる可能性はある。でも〈ほぼ関係者でやったから〉ということを差し引いても、まだなんとなくいけるような気がしている。

最後に臨床哲学として（ちょっと気が引けるので臨床哲学のゼミの中で）〈環境〉にかかわることについて少し。確かに〈環境〉というと漠然としていて、〈自然観察〉というと遊びの延長のように聞こえるかもしれない。しかし、環境を通して問題となることは、問題に対するアプローチの違いはあるが、医療や教育などを通して考えようとしている問題と何かが異なるということはないように思う。環境班の自然観察会に参加する人が増えたらいいな、と思っている。

## 環境

### 曾谷 国広

環境班は当初ボランティア班として街の環境汚染問題に取り組んできた。ゴミ拾いもその一貫として考えられてきたが実践はされなかった。実際に行われたのは、茨木の車折にて山の間伐のボランティアをしたものであるが、山の自然に触れ、その山の自然を守るについても、人間の手を経なければ守れない現状をみてきた。

環境問題についてアルピニストの野口健は「環境問題を目の前にして、大人は考えるが、子供は動く」と言っている。彼は富士山の樹海のごみ掃除とか登山道のごみ掃除をボランティアを組んでやっていて、大人と子供がどの様に見どの様に感じるのかについてある対談で語っていた。目の前にあるごみを見て、なぜこんなところに捨てるのか、どこから、誰が、こんなことを考えるのが大人であり、何も考えずに、手にとってゴミ袋に入れるのが子供であるそうである。その子供（小学五年位女子）はこんなことをいっている「ごみを捨てる人も悪いが、捨てられているゴミを見ながら何もしないで通り過ぎてゆく人はもっと悪い」。そのままを言う。考え行動をするのはあなたがたであろうから。

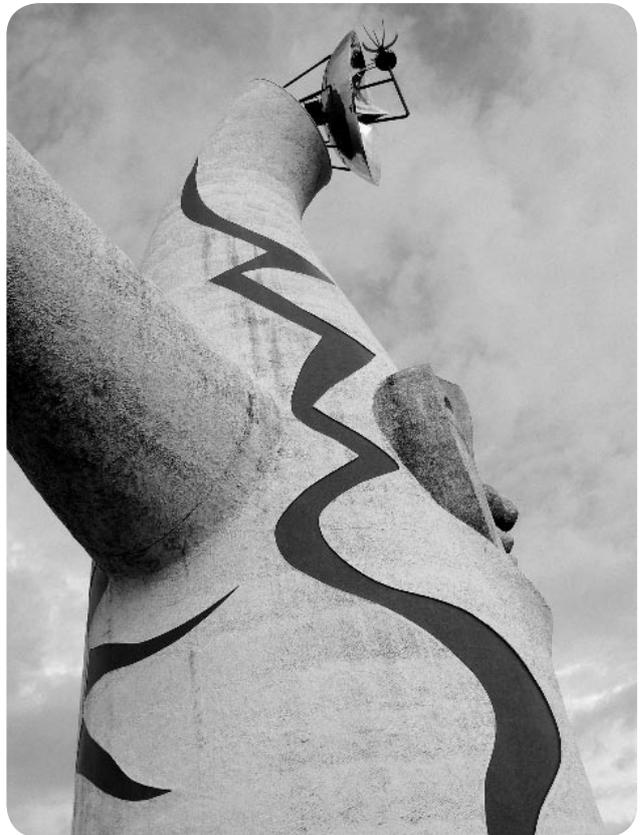
女優「東ちづる」は、テレビで白血病と戦っている子供の映像を見、感激してすぐに何かして

あげたくて電話帳から探してその子供の自宅に電話したそうである。電話にでてきたのは父親で、テレビで見た人達からたくさん励ましの電話がかかってきていて忙しそう、東ちづるの名前をいっても普通の人と同じように応対されて終わってしまったそうである。しかし、なんとかそういう人達の役に立ちたくて、骨髓バンクがあるのを知り連絡をして資料を取り寄せ、まず骨髓バンクに登録をしてそしていろんなボランティア活動に手を染めていったそうである。彼女が言うには「まず行動することで、その時あれかこれか考えていたら、いま自分がしているボランティア活動は無かったであろう」と言っていた。実際の社会的問題（医療、環境等）についてどのように扱うかは個人を基底にして考慮される場合、トップダウン的にその理念、概念について考えてから行動に移そうとしても難しいのではないだろうか。それよりもボトムアップ的にまず行動してその中から発生してくる諸処の問題について考えてゆく方がこれからの社会のあり方として受け入れられやすいように思う。

ここ2年環境班の人々は環境問題を考えるについて「エコツーリズムの実践」を検討されてきました。そして昨年（2006/07/09・11/26）の2回実行されました。第一回目（2006/07/09）は万博自然公園にて、環境班の方だけで行われました。自然に親しむということと実際にエコツーリストするに当たっての試行が目的であったのですが、これは作られた自然であり、「本

物の自然ではない」という意見がでてきました。自然の定義とは、人間の手を経ているということが根本になければならないのだろうか？確かに池の底はコンクリートであったし、道は舗装されていたところもあった。木の上に渡り廊下のようなものが作られ木を下にあるいはその木の上や野鳥を観察できる空間もあった。木々の植生も不自然ではあったが、人工の川の辺で両親が昼寝をし、子供が傍で水遊びをしている風景を見ながら、これこそ都会が求める、家族が求める自然なのではないかと考えた。社会的な自然というならば、今の在り様が自然であり、車を使用しCO2を撒き散らしているこの事実、そのために地球温暖化を促進していることも自然なのではないか。手付かずの自然は限定された中でしか見られない、都会においてはそのようなものである。「自然の怖さ」ということも話題になっていたように思います（間違っていたらお許し願いたい）。自然は怖いものだろうか。野性的という言葉があるが、今われわれが生活している場を主体にして自然をみた場合、それは怖いものと映るかもしれない。しかし、歴史的に見て、例えば奈良時代またはそれ以前の時代において、一つの村落を出て次の村落にたどり着くまでの道のりは、今われわれが自然として志向しているものであった。その道中は昼間でも危険であったろうし、夜にその道中、つまり村落を離れてしまうことは死を意味していた。現代に生まれ、育ったわれわれには想像もつかないことである。自然の怖さというが、そ

の怖さを克服するために人間は科学を用い適応してきたのである。しかし、今、自分たちで克服してきた自然を囲われた場所で経験している。人間も動物の一種である限り野性的なものを人間としての根源に持っているのである。未来世代において、地球自然公園リゾートにロケットによって他の惑星からエコツアーリストとして、われわれの子孫がこの地球にやってくることは予測するに難くない。われわれの実践する環境保護によって少しでも長く人間がこの地球に生存できる状態を作ればよいが、その間に地球より住みやすい惑星を見つけるか、そのように作ってしまえるように惑星を改造できるようになることにならなければ、人類という種の存続はないであろう。極端になってしまったが、エコツアーもその一環として人間にとって



なくてはならない根源にあるものを自覚させる一助になると思う。

第2回目は2006/07/11に同じく万博自然公園にて行われました。今回は一般の参加者も含めて後半に哲学カフェを行い自然観察についてそれぞれの考えを深められたものと思います。少し雨が降ってきて、その中での自然観察は天気の良い時とは違った自然観察ができました。木々の手触り、自然に聞こえる音、林の中に入っていくと、なんでもない隅っこにしゃがもうとすると蜘蛛の糸が張られていて、顔にひっかかったりする、はっとして、こんなところにも生の営みがあるということを見つけたとき、人間も他の動植物もこの一瞬の生を共有しているという感覚に捉われ感動しました。一体化ということについて考えさせられたものです。場所は前回と同じではありますが、コースが違ったので感覚的にも異なったものがあったように思います。また、雨の中でのカフェとなり、それなりに集中できたのではないのでしょうか。同じ体験をしたもの同志が対話をするということは、この自然観察を行う上で自然についてそれぞれの認識、考えを深める、そして自然観察会自体の考察を深めるためにも重要な行事であることに気づきました。

## 2度の自然観察会に参加して

川上 展代

世間で行われている自然観察会や哲学カフェのそれぞれについてすらほとんど予備知識も経験も持っていないのに、自然観察会と哲学カフェを合わせることで環境について考えるというアプローチを模索する班に入ってしまった。最初は不安に思いながらも、逆に先入観を持っていないことを強みにしてとにかくやってみようと切り替えて、この一年を過ごした。そして、同じ場所で行われた二度の自然観察会に参加することで、私は参加者側と主催者側の双方を経験することができた。

初回の自然観察会は、プログラムを考える事前の分科会に何度も出席しながらも、完全に“お客さん”の気分で参加した。自然園のようなところに入るのは久しぶりだし、ゆっくりと緑の中を歩き回ることも自体もかなり久々に、それだけで「自然」を満喫した気分になった。樹木の名前、土の中や水の中の生き物といった新しい知識も身につけられたが、音を絵にして、それを他の参加者と一緒に発表しようというプログラムが最も印象的だった。立ち止まって耳を澄ますこと、それを線や点で表現して他の人と話すことで、自分の「気づく感覚」について考えることがで

きた。そして、最後に行われた哲学カフェでは、同じ一日を過ごした人たちから出てくる意見の違いや、目の向け方の違いに驚いた。その違いはどこからくるのか、自然観察会はどこまで「作る」ことができるのか、そもそも「作って」よいのか、という疑問が出た。二度目は、そのような視点を持ちながら、主催者の立場を考えながら参加した。哲学カフェのタイミング、それまでの観察会の進行や内容などについて事前に検討を重ねた。当日の参加の仕方は初回と同じく“お客さん”だったが、他の人がどのように見ているか、どのように言葉にしているかについて注意しながら一日を過ごした。この時もやはり他の人の感覚や目のつけどころに刺激を受けつつ、内容や内容の方向性について議論を重ねることが大事であること、また、観察会中の会話について気を配ることがカフェの充実につながっていくのではないかとこのことを感じた。

イベントとしての観察会の運営と、カフェの進行。目的を明確にしながら二つの要素を織り交ぜてうまく一つにまとめていくためにも、二度にわたって自然観察会を開催してみたことは大きな前進だったと思う。やってみる、考える、またやってみる、手探りすぎて進んでいるように見えなくても、意味がないように見えても、それが一番近道ではないかと思う。

自然との別の関係を探して

紀平 知樹

## 1 万博記念公園と自然観察

環境班では、7月9日に万博記念公園の自然学習の森を利用して自然観察会を行った。観察会当日は、薄曇りではあったが、しかし気温はかなり高く、蒸し暑さとたたかいながらの観察会ということになった。午後1時にモノレールの万博記念公園駅に集合し、午後4時頃までに自然学習の森を一周して、その後1時間ほど、自然観察会の体験をもとに参加者で議論を行った。

自然学習の森は、万博記念公園の西南の一角を占めており、その名の通り自然を学習できるような工夫がなされている。例えば、主要な樹木には名前の札がつけてあるが、その名前がすぐにはわからないように名前は隠されており、その植物がどのような植物かを示唆するようなヒントが書かれている。それで、その森を歩きながら植物の名前をクイズ形式で覚えていくことができる。またソラード(森の空中観察路)という施設があり、それに昇れば、地上から樹木を見上げながら歩くのではなく、むしろ樹木を上から眺めながら歩くことができるようになっている<sup>1</sup>。

集まったメンバーは、誰もそれほど植物に詳しいわけではなく(わたしも昨年、あるNGO団体の主催する自然観察指導員の講

習会に参加したが、田舎育ちのわりには子どものころからそれほど自然が好きではなく花の香りなどをかいても、心が休まるというよりは、どちらかといえばむせかえるという感じで、敬遠していた方である)、本当に自然観察会なるものが成立するのかどうか不安であった。

ここで少し自然観察会の理念についてふれておこう。ごくおおざっぱに言ってしまうと、自然観察会とは、自然と親しみ、自然とふれあいながら、自然を大切にしたいという気持ちで育むための活動であるといえるだろう。ここでいう自然とは、希少な自然、手つかずの自然のみを指すのではなく、道端に生えている雑草や公園や校庭の花壇であってもいい。さらに自然観察会では、植物の名前や種類についての知識を増やすことが主な目的である必要はない。むしろ自然、生態系のつながりを感じ取るの方が重要な課題かもしれない。つまり知識よりも感覚を重視するということである。

さて、しかしその点に問題があるのではないかというのが昨年度から引き続き行われているこの環境班の問題意識である。つまり自然観察会は、環境教育、自然保護を目指しているが、たんに自然を感じるだけで、そのまま自然を大切に思う気持ちが育まれるのだろうかという疑問である。あるいは、自然が好きであることと環境保護は直結するのかと言いかえてもいいかもしれない。例えば鬼頭



ソラード

秀一は、『自然保護を問いなおす』の中でエマソンやソローに言及しつつ、けっきょく彼らは都会人であり、都会人として失われていく自然に郷愁のような感慨をもつロマン主義ではないかという疑念を呈し、彼は独自の社会リンク論を展開し、切り身ではなく、普段の生活と環境問題とのつながりを重視しているが、自然を感じることに重点を置いた観察会は、ある種のロマン主義的な傾向をもってはいないだろうか。もちろん、いわゆる「自然」と切り離された都市に住む人間にとって、自然との接点を増やすことはそれなりに意味のあることではあろうが、しかしその反面、「自然」とはどこかに出かけることによって見いだされるものだという感覚が、さらには自らの足下の自然（環境）を見失うことにならないだろうか。このような問題点に対して環境班では、観察会終了後に対話を行うことによって、感じるということからさらに一歩先にすすめる（どこへ？）ことを考えた。

## 2 第1回自然観察会

話を観察会当日のことに戻そう。わたしたちは、自然学習の森をぶらぶら（本当にぶらぶら）歩きながら、通り抜けて、「花の丘」といわれる場所に出た。ここは、春には菜の花が、そして秋にはコスモスが一面に咲く小高い丘であるが、わたしたちが観察会を行った当日はほとんど何も咲いていなかったように思うが、ここで休憩をかねて簡単なスケッチを参加者にしてもらうことにした。ここでのスケッチは、いわゆるスケッチ、つまり木や草花を書くというスケッチではなく、音を描くというスケッチである。つまりその場所で聞こえてくる音をその音にふさわしい（それぞれ個人的に）線で表現してもらおうというものである。このスケッチは、意外に評判がよかったようで、参加者全員黙々とスケッチに取り組んでいた。そしてそのスケッチが完成した後で、全員で自分の描いたスケッチを見せて、ごく簡単にその絵について説明してもらった。そうするとみんな聞いている音が違ったり、同じ音でも全く違う線で表現したりすることが明らかになり、参加者同士で自然とその違いがどういう違いなのかを確認しようとしていた。

スケッチが終わったあと、来た道をまた戻りつつ、観察会の最後のアクティビティである哲学カフェをする適当な場所を見つけて、そこでとりあえずこれまでの観察会を振り返

りながら哲学カフェを行うことになった。「適当な場所」と書いたが、実際には特に日を遮るものもなく、夏の沈みかけた日を浴びながらの対話になってしまった。ふだん、これほど長時間歩くことなどめったにない私は、徐々に疲労してきており、身体に染みこんでくる残照と戦いながらの対話であった。

実際のカフェの詳細な内容は、各参加者の感想に譲ることにするが、他の参加者も疲労のためか、初めのうちは口が重かった。しかしその中でも「これまで見てきた自然は、ほんとうの自然なのか？」という問いが提出され、そこから「自然の怖さ」というテーマに話は進んでいった。後述する二回目の観察会の参加者の感想にもあるが、「ほんとうの自然」という問題は重要な問題であり、それほど活発に対話が行われたとはいえないが、それなりに収穫はあったのではないかと思う。ここで、この日の哲学カフェに関する問題点をいくつか挙げておくことにしよう。

- ・ 観察会でのアクティビティが、何を意図したものかはっきりしていなかった。
- \* 漠然とある手いるだけで、何をみせるのかがはっきりしていない。
- ・ 観察と対話との連続性が十分ではなかった。
- \* これは、観察したことと対話の内容に連続性がなかったということではなく、むしろ、「はい、では哲学カフェをはじめます」というような感じで、対話を

はじめてしまい、観察から対話への頭の切換が参加者の中で十分ではなかったのではないかと思われる。

以上のような反省点を踏まえて、環境班ではさらに二回目の自然観察会を計画することになった。二回目の計画をすすめる中で、いくつかの問題点が浮上してきた。例えば、一回目の観察会の反省点として、観察会でのアクティビティの意図がはっきりしておらず、参加者にどのような自然をみせるのかが漠然としていたということを挙げたが、この点に関しては逆に、あまりにも開催する側が参加者の視点を縛るのはよくないのではないかという指摘があった。

自然の観察と哲学カフェとの関係を緊密なものにするには、観察の間に、カフェのテーマになりうるような経験をしてもらうということが考えられる。あるいは、カフェのテーマを先に設定しておいて、そのテーマに気づくような観察の仕方を考えるということもあるだろう。しかしこの環境班では、基本的にはそのようなやり方はとらないことにして、ある種の偶然性に観察会を委ねることになった。というのも、主催者側が、みせたい自然をみせるというやり方は、一方で確かにカフェでの議論に結びつけやすいが、しかし、それは結局参加者の視点を拘束し、参加者それぞれの感じ方の違いを消滅させてしまうことになりかねないし、そのことによって、対

話そのものがある種の目的論的な、つまり結論ありきという性格を持ってしまっているのではないかと思われたからである。また目的もなくぶらぶらと歩くということの中で、それぞれの参加者が何を見るのか、あるいは各人が勝手に見るものの中にこそ自然について多角的に考えるきっかけがあるのではないかという感想もあった。

しかしその反面で、自然観察会を偶然性に委ねるということは、場合によっては何を見て、何を議論したのかよくわからない一日になってしまう可能性もあるということは肝に銘じておかなければならないだろう。しかしそうならないためにも、視点を縛るといふとは別の仕方で、ある程度は何らかの仕掛けも必要ではないだろうかということが話し合われた。そして例えば、最終的に対話へとつなげるためには、観察の中で感じたことを、そのつど言葉にしていくことが重要なのではないかという意見があった。そして「オノマトペ」を用いるという案が浮上してきた。

またプログラムの組み方に関しても、この第一回目の観察会では、対話の時間を最後に設けたわけだが、私以外の参加者も同様に、疲労を感じていたようで、むしろ観察の途中で、休憩の意味合いも込めながら、対話を行う方がいいのではないかという意見も出された。そして最終的には、次のようなプログラムが組まれた。

- ・ぶらぶら歩きながら、道々にある樹木を視覚的に見た感じと、触ってみた感じとをそれぞれ擬音（擬態）語で表現してもらおう。（これをしてもらう木は、前もって調査して、いくつかの候補を絞っていた）
- ・また、公園内の木のいくつかには、クイズ形式で木の名前をあてるような工夫がされており、そのクイズに挑戦してもらおうような仕方で、参加者が観察だけでなく、言葉を発する機会を作ることにした。
- ・野鳥の森の中にある、観察小屋で冬鳥を観察する。
- ・同じく野鳥の森で、鳥の声や木々の音などを、線によってスケッチをし、その後各参加者に自分の描いたスケッチの説明をしてもらう。
- ・その後、公園内にある休憩所を利用して90分程度の哲学カフェを行う。
- ・対話終了後、また散策しながらスタート地点に戻り、観察会終了。

以上のようなプログラムを立てて、当日の自然観察会に臨んだのだが、当日はあいにくの曇り模様であった。

### 3 第2回観察会

わたし自身は京都に住んでいるので、天候が微妙な場合、万博記念公園に比較的近い榎本、辻村のお二人に開催するかどうかの判断

を任せることにした。当日の朝早く、榎本さんから、「小雨なのでやめようか」、という連絡が入るが、京都は確かに曇ってはいるものの、まだ降っておらず、またせっかくいろいろとみんなで考え、準備してきたことがもったいないという気持もあり、判断を任せたのにもかかわらず、決行を主張し、それを受け入れてもらい、開催することになった。榎本さんと私は、開催時刻より先に万博記念公園に向かい、その日に回るコースをもう一度前もって回っておき、どの木をみせるかということや、自然の音を聴く場所をどこにするかの最終決定を行なった。

参加メンバーが集まり、観察会がスタートしたが、天候は雨が降ってはいないものの、曇天で色づいていた木々の葉も少し濁ったような感じだった。前回の観察会と比べると、参加者は倍ぐらいになっており、ぶらぶら歩いていると先頭と最後尾の間はかなり距離があいてしまうことがあった。そのためかスタート当初は、どちらかといえば低調な雰囲気だったような気がしないでもない。しかし、途中の木々で観察してもらうために立ち止まることによって、必然的に参加者の物理的な距離は縮まり、また木の樹皮を見たり触ったりする中で、自分自身発見したことをしぜんに他の参加者に話しているようだった。先頭を歩いていた私はといえば、天候とプログラムの進行具合のことが気になり、少し足早になっていたような気がす

る。参加者に書いてもらったアンケートを見ても、やはりもう少しのんびりしたかったというような感想があった。しかし木の観察を始めたあたりから、やはり参加者同士の会話も少し増えてきたようで、相変わらず先頭と最後尾との距離は縮まらないが、しかし最初出発したときのようなよそよそしい距離感というよりは、むしろリラックスした距離感になっていたように思う。

ちょうど野鳥の森について、観察小屋に入ったあたりで雨が降り出してきた。まだ小降りで続行可能な状態だったので、そのまま野鳥の観察を少しして、そこから場所を少し移動して、森の音を聴いてスケッチを描いてもらうことにした。このスケッチの途中で雨が徐々に強くなってきたが、参加者全員それほど雨も気にせず、耳を森の音に集中してスケッチを描いていた。約20分ほどスケッチを描いていた方と思うが、そのうちに傘を差さずにはいられないほど雨が降ってきて、本来ならその場でみんなのスケッチを見ながら感想をいいあうということを考えていたの



森の音のスケッチ

だが、急遽予定を変更して、哲学カフェで使用しようと考えていた屋根つきの休憩所に向かうことになった。

雨はいっこうにやむ心配をみせず、また雨に少し濡れたからか寒さも少し感じるようになってきたのだが、少し窮屈ながらも全員が屋根の中に入って、先ほど描いたスケッチについての説明をすることになった。今回のスケッチでは、音を線でかき分けるということをしてもらったので、まず参加者がいったい何種類ぐらの音を聴いたのかということを最初に訊ねることにした。そうすると、やはり聴いた音の数もそれぞれで、いちばん少ない人と一番多い人とでは、倍ほどの違いがあった。そして数の少ない人から順番に、自分で描いたスケッチを提示しながら、どの線がなんの音を表現しているのかを説明してもらった。そうすると、きこえてきた音（参加者の感想にもあるように、その日は万博公園内で、他のイベントがあったり、隣のサッカー場ではJリーグの試合をしており、その応援の音が聞こえてきていた）すべてを線に描いている人もいれば、いわゆる「自然」の音のみを描いている人もいた。

この違いは、「聞こえてくる音を線で表現する」というこちらの指示をどのように理解するかの違いであるといえるが、その背後にはさらに、「自然観察会」という活動において出された指示であるがゆえに、「自然の音」を描くと考えた人もいるだろう。しかし

もしそうだとするなら、そこには暗黙のうちに自然／非自然という区別が働いているのであり、聞こえてくるとの数を手がかりにして、自然とは何かを考えることもできるだろう。逆に、ほんとうに聞こえてくる音をすべて書き取っている人（例えば、人が歩く足音や、自分がスケッチをしているときにはしらせているペンの音を書く人もいた）は、文字通りすべてを描いているわけだが、そうだからといって、あらゆるものを自然と考えているかどうかはまた別の問題かもしれない。意外と、いわゆる自然の音だけを描いた人と、その人が考える自然が同じことだってありうるだろう。

さて、一通り全員が自分のスケッチの説明を終えたあと、これまでの自然観察にもとづいた対話を行うことになった。今回の対話は、前回に比べればよく意見も出ていた。これにはいくつかの要素が考えられるだろう。前回は疲労感と残暑との戦いだとするなら、今回は雨と寒さとの戦いだったのでコンディションの悪さという意味では同じようなものだろう。しかし今回はその雨のおかげで、コースを少し短縮したので前回ほどの疲労感がなかったということ、そして本来は別の場所でするはずだったスケッチの説明も、対話がはじまる直前に行うことになり、全員が一通り自分の言葉を話したあとで、そのまま対話に入っていくことができた。もちろん積極的に発言する参加者がいたということも挙げられ

る。この対話の詳細は、その様子の報告のページを見てもらうことにするが、テーマは「自然との一体化」ということが上がってきた。この問いもやはり、第一回目のテーマと同様に、「自然とは何か？」という問題に突き当たることになる。この会の予定では、カフェの時間は90分ぐらいとっていたわけであるが、多くの参加者にとって観察会をはじめでの体験ということもあり、またかなり雨がきつくなり風も吹いてきたので、ファシリテータの判断で、予定より早めに切り上げて、観察会を終了することになった。短い時間ではあったが、問いを立て、それを深めるということがある程度はできたのではないかと思われる。

以上、記憶をたどりながら二回の自然観察会の概要を書いてきたが、最後にこの二回の観察会の総括を行っておきたい。

#### 4 自然観察の非日常性

参加者の感想のなかで、「自然観察会はフィクションなのではないか」ということがいわれていたが、この問題は環境班がエコツアーや自然観察会について調べたり、実際に参加したりする中で浮上してきたそれらの「非日常性」という問題と重なるだろう。最初にも述べたが、多くのエコツアーや観察会では、「自然とのふれあい」や「自然の中での体験」ということを謳っているが、そのような経験

が行き着く先については無頓着とまではいわないとしても、楽観視しすぎているのではないかとと思われる。すなわち、自然と触れあうことによって、自然の大切さを知り、それが環境問題の解決につながると。このような連鎖が起こらないとはいわないが、しかしそれらの事柄は、そんなに簡単につながるものなのだろうか。たとえばある種のブームの中でエコツアーは順調にその集客力を伸ばしているように思われる。例えば、西表島では、エコツアーブームの裏側で、ツアー客の増加による自然破壊が深刻化してきている。わたし自身、ここ数年の間続けて西表島に行き、エコツアーに参加しているので、環境破壊の一端を担っているかもしれないので自戒の念をこめていうが、エコツアーに参加して楽しいのは、やはりふだん見慣れない景色、生き物、植物を見ることであり、それが必ずしも自分の身の回りの環境を保護する意識に直結するわけではないのではないだろうか。これは自然観察会でも同様ではないだろうか。どこかへ出かけることやふだんは見たり聴いたりすることのないものを見たり聴いたりするというのが、エコツアーや観察会の主要な部分を形成している。つまり「ふだんとは違う場所」、「ふだんとは違う見方」がこれらの活動の核にあるように思われる。

しかしあまりにもその部分に対する興味が優先されてしまうならば、それは単なる「見物」とそれほど代わりがないのではないだろ

うか。すなわち珍しい建物を見る、珍しい彫刻を見るということと珍しい自然を見るということの間に本質的に違いはないのではないだろうか。あるいは、「ふだんとは違う」ということへの興味は、「ふだん（日常／現実）」を覆い隠してしまうことになる可能性がないだろうか。すなわち遠いところにある珍しい自然は保護すべきであるが、自らの足下の自然への注意が薄れてしまうのではないか。しかしまた同時に、この非日常性やフィクションがなければ、こういった活動は成立しないのではないかとも思われる。だとすると、この非日常性やフィクションをなんのために作り出そうとしているのかという目的と、その目的にとって作り出されたフィクションが十分かどうかということを常に考えていく必要があるだろう。その中心になるのがやはり「自然とは何か？」という問題である。

いまのところこの環境班で考えている自然観察会は、この問いを考えるための観察会だといえるであろう。この問いを考えるのに、万博記念公園はふさわしい場所かもしれない。というのも、その名の通りこの公園はもとは大阪万博の会場であり、その後には造営された人工的な自然である。しかしまた大阪という都市でこれほどまでに樹木がたくさんあり、容易に歩き回れる場所はそうないのである。しかも「自然学習の森」や「野鳥の森」といった名称が付けられているように、観察会を助けるための工夫も随所に施さ

れている。もちろんこのような自然はほんとうの自然ではないということもできるだろうが、しかしそれではほんとうの自然とはなんなのだろうか。それらを分けるのはなんだろうか。一つの回答として考えられるのは、人手が入っているかどうかであるかもしれない。しかし地球温暖化という問題を考えた場合―それが人為的な影響によって引き起こされているとするなら―、間接的にはあれ、地球規模で人為的な影響が現れてきているのであり、そうであるなら人手の入っていない自然などないのかもしれない。また里山の場合のように、人手が入ることによって豊かな自然が持続するということもありうるだろう。とするなら、わたしたちが見るものすべてが自然といえるかもしれない。アスファルトやコンクリートもまた自然であるというのは、少し行き過ぎかもしれないが、しかしアスファルトの上にも自然の営みはありうる。逆に、自分の生活の場から遠く離れた山奥に入っていくことは、あまりにも非日常性を演出しすぎることになるかもしれない。お

そらく、自然観察にとって重要なことは、自然をふだんとは別の仕方で見ることではないかと思う。別の仕方で見ることによって、いつもとは別の自然が現れてくるのではないだろうか。そこに自然の多様なあり方が―例えば人間の環境ということだけではなく、他の生き物にとっての環境でもあるというあり方など―、現れてくる。そうした自然の多様なあり方に気づき、自分と自然環境との関係が、そのようなあり方の一つにすぎないということに気づくことが重要なのではないかと思う。

いずれにしてもこの観察会はまだ始まったばかりであり、今後も継続的に会を開催し、この問題に取り組んでいきたいと思う。

1 詳しくは [http://park.expo70.or.jp/facil/facil\\_14.html](http://park.expo70.or.jp/facil/facil_14.html)

